長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集

OYASHIKI－SITE

小屋敷遺跡

県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査

1997

長坂町教育委員会

峡北土地改良事務所

山梨県長坂町

小屋敷遺跡

県営圃場整備事業にともなう埋蔵文化財発掘調査

1997. 3

長坂町教育委員会

峡北土地改良事務所

序

雄大な八ヶ岳南麓は、縄文時代から中近世にいたるまでの遺跡の密集地帯として知られています。この麓のほぼ中央に位置する長坂町では、水田農業の近代化を目的として、町内ほぼ全域を対象に圃場整備事業を推し進めています。

今日、圃場整備事業はほぼ完了しつつありますが、町内ではこれに伴い数多くの遺跡が発掘調査され記録として保存されました。

本報告書も1991年度の山梨県営圃場整備事業にともない発掘調査された小屋敷遺跡の概要を記したもので、縄文時代から中世にかけての様々な資料が出土し、地域の歴史教育教材の一つとなったことはもちろん、縄文中期の学術的に貴重な土器が多数確認されました。本報告書がひろく教育や研究の場に活用されることを望みます。

地域住民の皆様の多大なご理解のもとに発掘調査が完了したことを深く感謝するとともに、調査へのご指導、ご協力をいただいた関係機関に御礼申し上げます。

平成９年３月

長坂町教育委員会
教育長　小松清寿

例　言

1　本書は山梨県北巨摩郡長坂町大八田字小屋敷　他に所在する小屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は山梨県営圃場整備事業にともない、山梨県峡北土地改良事務所からの委託を受け長坂町教育委員会が実施した。

3　本書の編集は小宮山隆（町教育委員会埋蔵文化財担当）が行った。

4　遺物実測・図面作成・トレース・図面整理・表作成等に関わる業務については吉田光雄（調査補助員）、石川昭江、井出仁美、長田加代子、清水純代、橋本はるみ、日向登茂子、深沢憲子（整理作業員）が行った。なお、出土石器の資料化と報告は村松佳幸（山梨県埋蔵文化財センター）が行った。

5　出土品及び図面・写真は長坂町教育委員会が保管している。

小屋敷遺跡

Contents

もくじ

本文

序

例言

第１章　調査の経過と概要……9

1　調査の経過……9

2　遺跡の概要……9

3　調査組織……10

第２章　遺跡をとりまく環境……11

1　自然環境……11

2　長坂町内の遺跡分布……11

第３章　発見された遺構と遺物……15

1　A区の調査……15

2　B区の調査……15

3　C区の調査……23

4　D区の調査……59

第４章　調査のまとめ……60

1　C区東地区出土の縄文時代中期終末土器について……60

2　おわりに……62

表紙写真　小屋敷遺跡全景

挿図

第１図　長坂町の遺跡分布図……12
第２図　小屋敷遺跡の位置……14
第３図　Ａ区全体図……16
第４図　Ｂ区北全体図……17
第５図　Ｂ区南全体図……18
第６図　Ｂ区南１号住居……18
第７図　Ｂ区南２号住居……19
第８図　Ｂ区南３号住居……19
第９図　Ｂ区南４号住居……19
第10図　Ｂ区南５号住居……19
第11図　Ｂ区南６号住居……20
第12図　Ｂ区南７号住居……20
第13図　Ｂ区出土土器……21
第14図　Ｂ区出土石器……22
第15図　Ｃ区西全体図……26
第16図　Ｃ区西１号住居……26
第17図　Ｃ区西２号住居……26
第18図　Ｃ区東全体図……27
第19図　Ｃ区東１号住居、２号住居、３号住居……28
第20図　Ｃ区東４号住居……28
第21図　Ｃ区東５号住居、６号住居、７号住居……29
第22図　Ｃ区東土壙内出土土器１……30
第23図　Ｃ区東土壙内出土土器２……31
第24図　Ｃ区東土壙内出土土器３……32
第25図　Ｃ区東土壙内出土土器４……33
第26図　Ｃ区東出土土器１……34
第27図　Ｃ区東出土土器２……35
第28図　Ｃ区東出土土器３……36
第29図　Ｃ区東出土土器４……37
第30図　Ｃ区東出土土器５……38
第31図　Ｃ区東出土土器６……39
第32図　Ｃ区東出土土器７……40
第33図　Ｃ区東出土土器８……41
第34図　Ｃ区東出土土器９……42
第35図　Ｃ区東出土土器10……43
第36図　Ｃ区東出土土器11……44
第37図　Ｃ区東出土土器12……45
第38図　Ｃ区東出土土器13……46
第39図　Ｃ区東出土土器14……47
第40図　Ｃ区東出土土器15……48
第41図　Ｃ区東出土土器16……49
第42図　Ｃ区東出土土器17……50
第43図　Ｃ区東出土土器18……51
第44図　Ｃ区東出土土器19……52
第45図　Ｃ区東出土土器20……53
第46図　Ｃ区東出土石器１……54
第47図　Ｃ区東出土石器２……55
第48図　Ｃ区東出土石器３……56
第49図　Ｃ区東出土石器４……57
第50図　Ｃ区東出土石器５……58
第51図　Ｄ区全体図……59
第52図　加曽利Ｅ式系周辺資料……60

写真図版

図版１　小屋敷遺跡Ｃ区東全景……65
図版２　Ｃ区東出土土器……66
図版３　Ｃ区東出土土器……67
図版４　Ｃ区東出土土器……68
図版５　Ｃ区東出土土器……69
図版６　Ｃ区東出土土器……70
図版７　Ｂ区出土土器……70
図版８　Ｂ区出土石器……71
図版９　Ｃ区東出土石器……71
図版10　Ｃ区東出土石器……72

第１章　調査の経過と概要

１　調査の経過

小屋敷遺跡は山梨県北巨摩郡長坂町大八田に位置し、小字名では小屋敷・道風・中之台にひろがる。1990（平成２）年、山梨県農務部耕地課および山梨県峡北土地改良事務所から町教育委員会に長坂地区第Ⅲ工区の県営圃場整備事業計画についての事前協議がなされた。町教育委員会では同年11月から12月にかけて現地踏査と試掘調査を実施し、鳩川右岸の山梨秋田農協（現ＪＡ梨北秋田支所）付近から中央自動車西宮線にかけての約21,000㎡の範囲に、縄文時代から中世の遺物・遺構が確認された。

町教育委員会では遺跡の保存について山梨県農務部と協議を重ねたが、圃場整備の工法的に現状保存が困難であるとの結論に至り、約13,850㎡の範囲について記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は1991（平成３）年６月から10月まで行われた。調査終了後に担当者や教育委員会事務局職員の異動・退職が相次いだためか、小屋敷遺跡の整理作業は大幅に遅延し、報告書刊行の目途すらたてられない状態であった。しかし1995（平成７）年、長坂町も含め北巨摩郡下の未報告遺跡に対する報告書刊行を促す県教育委員会学術文化課からの指導に基づき、町教育委員会は県農務部および峡北土地改良事務所と協議し、翌1996（平成８）年、県営圃場整備事業に関わる小屋敷遺跡ほか未報告遺跡の整理事業について、負担協定を締結した。これによって、町教育委員会では同年４月から翌年３月までこれら遺跡出土資料の洗浄・注記・接合作業と、教育委員会に保管されていた図面と写真の整理作業にとりくみ、小屋敷遺跡分について報告をここに行う運びになった。

２　遺跡の概要

1992（平成４）年４月10日付けで、町教育委員会が文化庁長官宛に提出した「平成３年度小屋敷遺跡外遺跡発掘調査事業実績報告書」の調査所見をまず以下に記しておく。

「小屋敷遺跡は、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４地区において調査し、昭和58年・59年・63年に調査を行った小和田館跡に接する地域で、館跡の外郭部としての中世遺構を中心として、さらに時代を遡った平安時代の住居跡、縄文時代の土壙が確認された。」

さて調査区の位置は第１図に示したように南北に細長く、鳩川東岸の低尾根上にある。厳密には南からＡ区、Ｂ区南、Ｂ区北、Ｄ区、Ｃ区西、Ｃ区東の６つの調査区に分かれる。中世室町時代の領主層の館と集落が確認されている小和田館跡は、小屋敷遺跡Ｃ区北側の中央自動車道ルート付近からさらに北側に展開している。これに関わる可能性がある遺構はＣ区東の薬研堀遺構である。縄文時代の土壙群が確認されたのは最も北側のＣ区である。ここからは縄文時代中期終末を中心とした約150基の土壙が確認された。縄文時代では中期初頭の住居址がＢ区南で１基確認された。平安時代の住居址はＢ区南で７軒、中世の住居址はＣ区西で２軒、Ｃ区東で９軒ある。いずれの遺構も調査時図面の紛失（？）やその後の

保管状況等に不備の点があり、残念ながら個々については説明できないものが多い。

3　調査組織

1991（平成３）年度発掘調査

事業主体　　長坂町教育委員会

調査担当　　桜井真貴（長坂町教育委員会技師：当時）

事 務 局　　平井美隆（長坂町教育委員会教育長：当時）

　　大石康雄（長坂町教育委員会教育課長：当時）

　　植松　本（長坂町教育委員会教育係長：当時）

1996（平成８）年度整理事業

事業主体　　長坂町教育委員会

整理担当者　　小宮山隆（長坂町教育委員会主事）

事 務 局　　小松清寿（長坂町教育委員会教育長）

　　植松　忠（長坂町教育委員会教育課長）

　　輿石君夫（長坂町教育委員会生涯学習係長）

第２章　遺跡をとりまく環境

１　自然環境

小屋敷遺跡は北緯35度50分10秒、東経138度23分10秒に位置し、標高705mから730mの南北に細長くのびる低尾根上の緩斜面に立地する。このような低尾根は、第四紀火山の崩壊としては日本で最大規模といわれる蓜崎岩屑流によって形成された八ヶ岳南麓緩斜面を、塩川の支流である鳩川や泉川といった中小河川にわずかに浸食されてできたもので、標高700m付近を境に下流域では段丘が発達してくる。なお、小屋敷遺跡の調査では遺構覆土は別として、標準土層堆積に関する記録はない。

２　長坂町内の遺跡分布（第１図、第１表）

小屋敷遺跡の周囲は非常に多くの遺跡が分布している。縄文時代では柳新居遺跡で中期前半の集落跡[1]が、柳坪Ａ・Ｂ両遺跡[2]では中期後半の集落跡がそれぞれ発掘調査されている。また別当遺跡[3]や原田遺跡[4]でも後期の集落跡が調査されている。さらに前期後半の天神遺跡[5]、中後期の絶神遺跡[6]、後晩期の国史跡金生遺跡など、八ヶ岳南麓を代表する縄文時代の遺跡群が周囲に数多く分布する。弥生時代から古墳時代の遺跡は少ないものの柳坪Ａ遺跡で弥生中期初頭の住居址と古墳前期の集落、塙原遺跡[7]で弥生後期前半土器の出土例があり、今後に遺跡数の増加が予想される。平安時代になると遺跡数は急増し、大八田地区の集落遺跡調査事例だけでも南新居西遺跡[8]、小和田館跡[9]、原田遺跡、柳坪Ａ・Ｂ両遺跡、柳坪南遺跡[10]、塙原遺跡が挙げられる。中世・戦国時代では国人領主層の館とそれをとりまく集落が確認された小和田館跡、堀と土塁が良好に遺存する深草城址がある。

---

1) 未報告

2) 山梨県教育委員会1975『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡長坂・明野・蓜崎地内－』
山梨県教育委員会1986『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集　柳坪遺跡』

3) 長坂町教育委員会1987『深草遺跡　別当十三塚遺跡　別当遺跡（第２次）　祓屋敷遺跡』

4) 長坂町教育委員会1989『大八田・原田遺跡』

5) 山梨県教育委員会1994『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第97集　天神遺跡』

6) 大泉村教育委員会1987『絶神遺跡』

7) 未報告

8) 長坂町教育委員会1991『南新居西遺跡』

9) 長坂町教育委員会1985『小和田館跡』

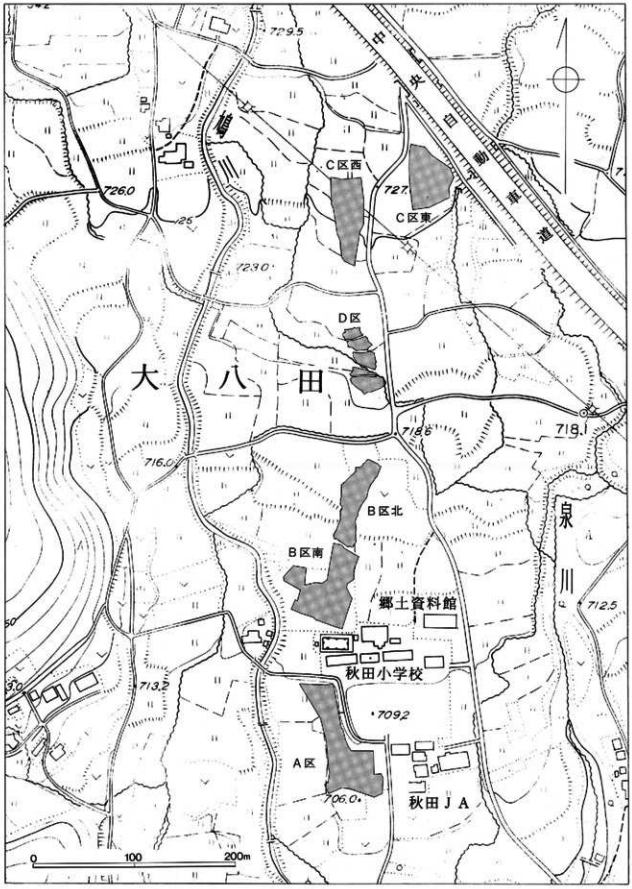
10) 未報告

第１図　長坂町の遺跡分布図

表１　長坂町の遺跡分布一覧

（縄＝縄文時代　弥＝弥生時代　古＝古墳時代　平＝平安時代　中＝中世）

001　耳塚　中
002　法性寺前遺跡　縄　中
003　信玄原遺跡　縄
004　小荒間古戦場跡
005　桜畑遺跡　近
006　小泉遺跡　近
007　菅間遺跡　縄
008　桜畑南遺跡　縄
009　糀屋敷東遺跡　縄
010　糀屋敷北遺跡　縄
011　糀屋敷遺跡　縄
012　牛久保遺跡　縄　弥
013　牛久保南遺跡　縄
014　沢入遺跡　縄　中
015　宇平平遺跡　縄　中
016　東下屋敷遺跡　縄
017　西下屋敷遺跡　縄
018　新田森遺跡　縄
019　西下屋敷南遺跡　縄
020　横手遺跡　縄　中
021　神之原遺跡　縄
022　屋敷附遺跡　縄　中
023　内城遺跡　中
024　十郎林遺跡　縄
025　阿原遺跡　平
026　中尾根遺跡　縄
027　手白尾遺跡　縄
028　夫婦石遺跡　縄
029　横山１遺跡　縄
030　横山２遺跡　縄
031　横山平南遺跡　縄　平
032　茗原北遺跡　縄　平
033　上フノリ平北遺跡　縄
034　上フノリ平遺跡　縄
035　上フノリ平西遺跡　縄
036　下フノリ平北遺跡　縄
037　茗原遺跡　縄　弥
038　下フノリ平遺跡　縄　中
039　下フノリ平南遺跡　平
040　別当遺跡　縄
041　別当西遺跡　縄
042　別当十三塚
043　南新居北遺跡　中
044　深草城址
045　小和田遺跡　縄　平
046　南新居屋敷
047　南新居遺跡　平
048　南新居西遺跡　平
049　小和田館跡
050　米山遺跡　縄
051　米山東遺跡　平
052　塚田遺跡　平
053　蹴田遺跡　縄　古　平
054　弥右衛門塚１
055　弥右衛門塚２
056　浜田北遺跡　平
057　浜田遺跡　平
058　東原の土塁
059　東原遺跡　中
060　柳新居遺跡　縄　古　平
061　原田遺跡　縄　平
062　柳坪Ａ遺跡　縄　古　平
063　柳坪Ｂ遺跡　縄　古　平
064　小屋敷遺跡　縄　平
065　久保地遺跡　縄
066　成岡遺跡　縄　弥　平
067　成岡新田遺跡　弥　平
068　曲田遺跡　平
069　石原田北遺跡　縄　平
070　石原田南遺跡　縄　平　中
071　塚原遺跡　縄　平
072　越中久保遺跡　縄　平
073　久保遺跡　縄
074　厚屋敷遺跡　縄
075　池の平遺跡　縄
076　東蕪遺跡３　平
077　東蕪遺跡２　平
078　東蕪遺跡４　縄　平
079　東蕪遺跡１　縄　平
080　和手山東遺跡　中
081　小尾平遺跡　旧石　縄
082　間の原遺跡　縄
083　西蕪東遺跡　平
084　西蕪遺跡　縄
085　西蕪南遺跡　縄　平
086　和手遺跡　縄　平
087　勝巻遺跡　縄
088　城山上北遺跡　縄　平
089　城山上遺跡　縄
090　中丸城跡　中
091　屋久保遺跡　縄　平
092　清春白樺美術館南遺跡　縄
093　細久保遺跡　縄
094　後平遺跡　縄　平
095　狐平北遺跡　縄　平
096　狐平遺跡　縄　平
097　大平遺跡　縄　平
098　下鳥久保遺跡　縄
099　鳥久保遺跡　縄
100　高松遺跡　縄
101　上町遺跡　縄　平
102　酒香場遺跡　縄　古　平
103　東村Ａ遺跡　縄　平
104　東村Ｂ遺跡　古　平
105　中村遺跡　古　平
106　鎌田遺跡　平
107　西村遺跡　古　平
108　中反遺跡　縄　平
109　中丸・蓑塚
110　白山神社前遺跡　平
112　上ノ屋敷遺跡　縄　平
113　大々神十三塚　中
114　大々神Ａ遺跡　平
115　大々神Ｂ遺跡　古　平
116　治部田遺跡　古　平
117　頭無Ａ遺跡　平
118　樫木遺跡　弥　古
119　塚川・柳坪遺跡　縄
120　頭無遺跡（二本木遺跡）　縄　古
121　新田遺跡　縄
122　塚之越遺跡　中
123　原町北遺跡　平　中
124　原町遺跡　平
125　上久通北遺跡　縄　平
126　塚川の土塁　中
127　下村遺跡
128　塚川十三塚群
129　宮久保遺跡　縄
130　下村南遺跡　縄
131　泥屋西遺跡　縄　平
132　勝見遺跡　縄　平
133　競馬場遺跡　縄　平
134　寺前遺跡　縄　平　中
135　上久通遺跡　縄
136　反田遺跡　縄　平　中
137　三井氏屋敷跡　中
138　北村遺跡　弥　古
139　新居遺跡　縄
140　相吉氏屋敷跡　中
141　相吉遺跡　中
142　上松氏屋敷跡　平
143　下屋敷遺跡　縄
144　清水頭遺跡　縄　古　平
145　向原遺跡　平
146　三つ墓古墳２　消滅
147　原町農業高校前遺跡　縄
148　三つ墓古墳３　消滅
149　三つ墓古墳１　古
150　池之平昭和堤北遺跡　縄
151　池之平Ａ遺跡　縄　平
152　向井丹下屋敷跡　中
153　池之平Ｂ遺跡　縄
154　上日野遺跡　縄　平
155　田中氏屋敷跡　中
156　上日野Ａ遺跡　縄　平
157　上日野Ｂ遺跡　縄　平
158　上日野Ｃ遺跡　縄　平
159　建久保遺跡　平　中
160　日野原遺跡　平
161　上日野原遺跡　縄　平
162　富岡遺跡　近
163　横針遺跡　弥　古
164　大林遺跡　縄
165　中込遺跡　縄
166　季白尾東遺跡　縄
167　西屋敷遺跡　古
168　上町南遺跡　縄
169　龍角西遺跡　縄　古　平
170　龍角遺跡　古　平
171　長坂上条遺跡　縄　平
172　西久保遺跡　縄
173　新宿区健康村遺跡　縄　平
174　長坂下条・藤塚
175　和田遺跡　弥　平
176　古屋敷遺跡　縄
177　泥屋遺跡　縄
178　中込北遺跡　縄
179　浜沢　上町遺跡　縄
180　下屋敷北遺跡　縄　平
181　柳坪南遺跡　平
182　柳坪北遺跡　縄　弥　平
183　境原遺跡　弥　平
184　北村北遺跡　縄　弥　平
185　酒香場東遺跡　縄　弥　平
186　山本遺跡　縄
187　北村東遺跡　縄　古
188　大久保北遺跡　縄　中
189　天王塚古墳　古墳
190　池之平北遺跡　縄　平
191　清水頭北遺跡　縄　平
192　宇平平の土塁
193　成岡　藤塚
194　馬組場遺跡
195　糀屋遺跡　平
196　治部田北遺跡　縄



第２図　小屋敷遺跡の位置

第３章　発見された遺構と遺物

小屋敷遺跡の調査は前述したように、図面や写真等資料の保管等に不備があり、遺構や遺物の台帳も遺されていない状況なので、個々の遺構・遺物について出土状況のみならず出土位置すら正確に報告することができない。よってここでは、各調査区ごとに遺された図面と航空写真から全体図を作成し、出土遺物の図示を最大限の目的として報告する。

１　Ａ区の調査（第３図）

Ａ区は遺跡のなかで最も南に位置し、北東から南西方向に緩やかに傾斜する。調査面積は3,467㎡である。溝状遺構２基と土壙20基以上が検出されたが、図示できる遺物はない。

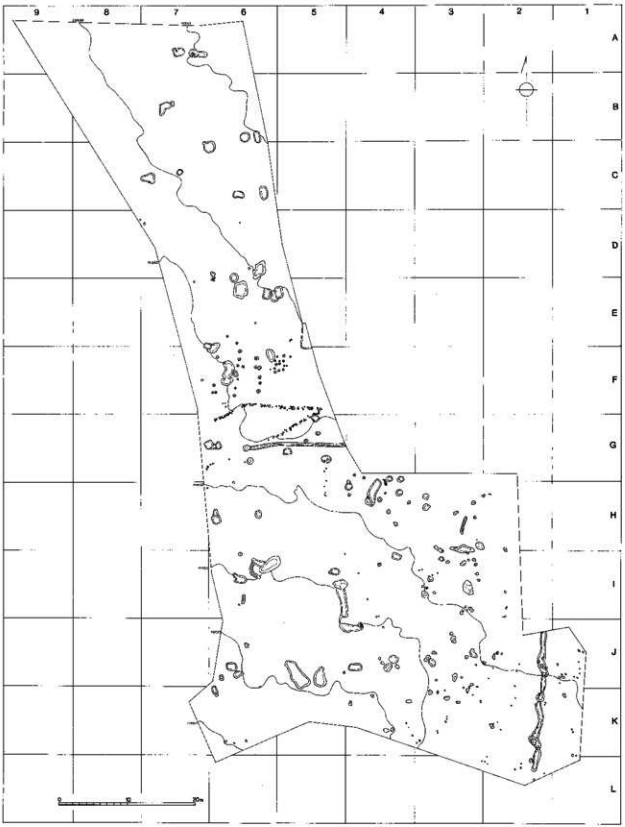
２　Ｂ区の調査（第４図、第５図）

Ｂ区は町立秋田小学校の北側にあり、さらに南北に分かれる。Ｂ区北は調査面積1,698㎡、Ｂ区南は3,101㎡で、Ａ区と同じく北東から南西方向に傾斜する。平安時代から中世の住居址がＢ区南で７基、また両区でややまとまりのある分布をみせる土壙群がある。

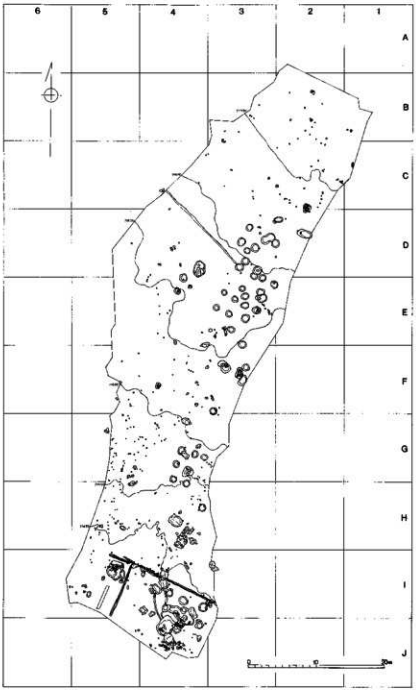
図示できた遺物は少なく、土器は縄文時代中期初頭から中期後葉にわたる（第13図）。石器は石鏃１点、打製石斧８点、横刃形石器５点が出土している（第14図）。１は黒曜石製の有茎石鏃である。基部形態は凸基で、茎部が欠損している。２～９は打製石斧である。２～８は側縁部が刃部に向かって幅広くなったり、屈折する撥型で、９は短冊型になると思われる。４・６・８・９は基部が、７は刃部がそれぞれ欠損している。石材は２がシルト岩、３・５・８・９が砂岩、４・６・７がホルンフェルスである。10～14は横刃形石器で、10のみ欠損している。12が頁岩で、それ以外はホルンフェルスである。

第２表　Ｂ区南 住居址一覧

住居No	長軸(m)	短軸(m)	所属時期	図版番号
１号住居	6.0	4.5	縄文時代中期初頭	第６図
２号住居	5.6	4.5	中世か？	第７図
３号住居	4.0	3.0	中世か？	第８図
４号住居	―	4.6	中世か？	第９図
５号住居	4.5	4.4	中世か？	第10図
６号住居	6.1	4.5	中世か？	第11図
７号住居	4.2	3.1	中世か？	第12図

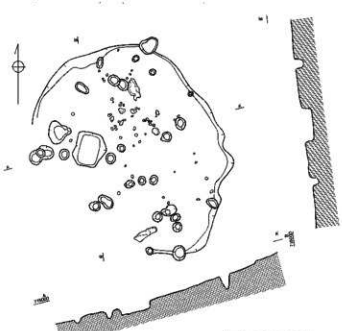


第３図　Ａ区　全体図

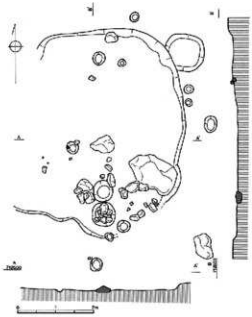


第４図　Ｂ区北　全体図

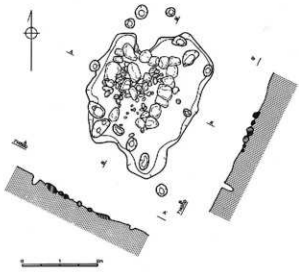
第５図　Ｂ区南　全体図



第６図　Ｂ区南　１号住居

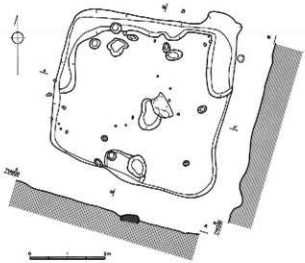


第７図　Ｂ区南　２号住居

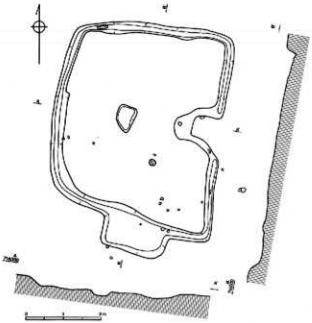


第８図　Ｂ区南　３号住居

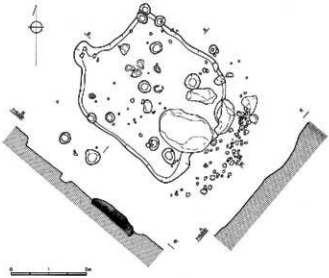
第９図　Ｂ区南　４号住居



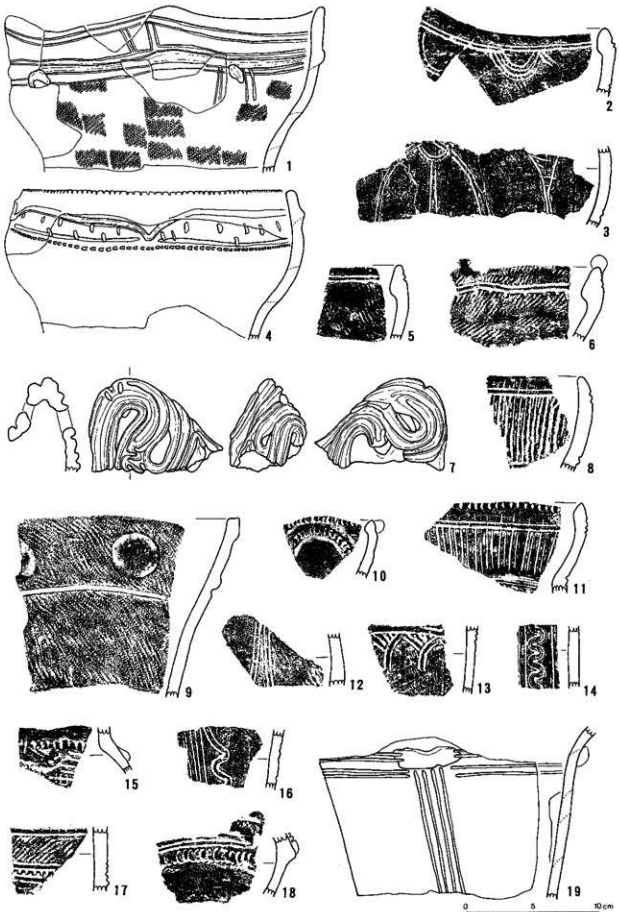
第10図　Ｂ区南　５号住居



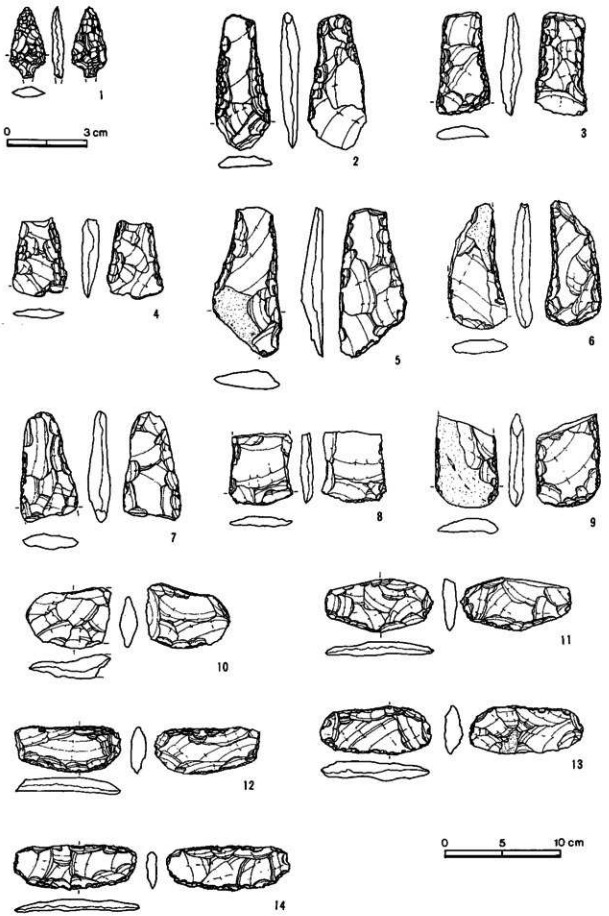
第11図　B区南　6号住居



第12図　B区南　7号住居



第13図　B区出土土器



第14図　B区出土石器

3　C区の調査（第15図、第16図）

C区は最も北側の調査区で、町道を挟んで東西二つの調査区に分かれる。C区西は調査面積2,332㎡、C区東は2,070㎡である。C区西が北から南へ低くなる低尾根上の緩斜面であるのに対して、C区西は北北西から南南東へ低くなる幅広い緩斜面になっている。

C区西からは、平安時代から中世の住居址２基、竪穴状遺構２基、土壙10基以上、溝状遺構１基が確認された。

第３表　C区西 住居址一覧

住居No.	長軸(m)	短軸(m)	所属時期	図版番号
１号住居	4.0	3.9	中世か？	第17図
２号住居	4.0	3.7	中世か？	第18図

C区東からは、約150基の土壙群と平安時代から中世の住居址９基、薬研堀遺構１基、溝状遺構が検出された。縄文時代中期後半から後期初頭にかけての土器が多く出土し、完形復原土器７を含め土壙群に関わる遺物とされる。これら土器の出土状況を追認できる資料は残されていないのだが、C区東では縄文時代の遺構がこの土壙群しかないこと、また覆土中から完形に近い縄文土器が出土した土壙が多くあったことから、これらの土壙群は中期終末を中心とした時期に位置づけられる可能性が高い。

第４表　C区東 住居址一覧

住居No.	長軸(m)	短軸(m)	所属時期	図版番号
１号住居	3.6	3.0	中世か？	第19図
２号住居	—	2.0	中世か？	第19図
３号住居	—	2.2	中世か？	第19図
４号住居	4.3	4.1	中世か？	第20図
５号住居	4.5	3.6	中世か？	第21図
６号住居	4.0	3.6	中世か？	第21図
７号住居	4.8	2.5	中世か？	—
８号住居	2.7	2.6	中世か？	—
９号住居	3.5	3.2	中世か？	—
10号住居	4.3	3.8	中世か？	—

C区東　土壙内出土縄文時代土器（第22図～第25図）

１は埋設土器と注記されていたが詳細はわからない。口縁部の突起を一つもち全面にＲＬの斜縄紋が施された中期中葉の深鉢である。２は前期末葉、３～８は中期初頭から前葉、９～13は中期後半曽利式新段階に

位置づけられる。

14～50は基本的に縄紋を地紋とし、隆帯紋または沈線紋による紋様区画が施された加曽利Ｅ式新段階に類する土器群である。14～16、18、19、21～22は隆帯による渦巻または楕円形の曲線区画紋が、17、20、23は隆帯による直線的な区画紋が施されている。24は口縁部付近に横位の、胴部に縦位のＬＲ縄紋をそれぞれ地紋とし、沈線により曲線区画された胴部が強く括れた深鉢である。25～36も沈線による曲線区画された土器群である。30は縦位のＬＲ縄紋を地紋として、沈線による曲線紋と不規則な列点が施された深鉢上半である。37～44は沈線による直線的な区画紋が施された土器群と思われる。45は縦位のＬＲ縄紋を地紋とし、胴部を沈線による逆Ｕ字状区画紋、頸部に１条の横位沈線紋が施された完形の甕である。46～49は地紋のみ、または無紋の土器片で、全体の紋様構成はわからない。50は口縁部付近に横位の、胴部に縦位のＲＬ縄紋が施された深鉢で胴部の括れが強い。

51～58は後期から晩期の土器を一括した。51～56は後期初頭から前葉、58は後期中葉、57は晩期後半と思われる。59は２条の平行する縦位の沈線が胴部に、１条の横位沈線が口唇部にそれぞれ施されたミニチュア土器である。60～72は土器底部を一括した。66～72は中期後半の台付深鉢底部であろう。

Ｃ区東　出土位置不明縄文時代土器（第26図～第45図）

73は前期末葉、74～83は中期初頭から中葉にかけての土器である。84～86、89は中期後半曽利式古段階の土器であろう。87は棒状工具による平行条線を地紋とした深鉢だが、この型式に特徴的な胴部の隆帯垂下紋はなく、頸部の条線施紋が乱雑であることから曽利Ⅲ式前後に位置づけられる。

88～146は曽利式新段階を一括したが、口縁部紋様や胴部垂下紋の有無・形状により若干の時間差が予想される。胴部の地紋に連続への字紋が施されるものがほとんどで、条線のものがわずかに含まれる。

147～426は、基本的に縄紋を地紋とし、隆帯紋または沈線紋による紋様区画が施された加曽利Ｅ式新段階に類する土器群で、Ｃ区東地区では最も出土量が多い。147～158は口縁部紋様帯を有する土器群である。147は胴部に縦位のＬＲの結節縄紋が施されている。159～172、174～218は隆帯による曲線区画紋が施された土器群である。159はＬＲ縄紋を地紋として２本単位の隆帯が全面に施され、160は１本単位の隆帯による渦巻紋と楕円紋が胴部に施された土器でいずれも口縁に４単位の波状突起がある。219～263は隆帯により胴部に直線垂下紋、口縁部に横位の隆帯を１条巡らす可能性が高い土器群である。219は口縁部の横位隆帯直下に横位の、胴部に縦位のLR縄紋を施す大型の深鉢である。173、264～324は沈線による渦巻あるいは楕円形などの曲線紋が胴部に施された土器群である。264はＲＬ縄紋を地紋として、胴部上半に渦巻紋と蕨手状紋の組み合わせ、下半に楕円紋が施され、胴部中央が最大径で胴部下半から底部にかけての括れが強まる。胎土がきめ細かく、整形、焼成ともに良好な優品で、完形で出土した。325～364は沈線によるＵ、または逆Ｕ字状の区画紋が胴部に施されたものであるが、楕円区画紋との区別が困難なものもある。365～416は沈線による直線的な区画紋が施された可能性の高い土器群である。全体的な紋様構成についてはよくわからない。417～426は地紋のみまたは無紋の土器片で、やはり全体の紋様構成はわからない。

427・428は壺形土器で、中期後半の両耳壺であろう。

429～468は後期以降の土器群である。磨消し縄紋が施された土器片のなかには中期終末のものと区別がつかない資料も含まれる可能性がある。457は晩期後半であろうか。465～468は紋様構成が判然としないが、胎

土や整形が後期以降の粗製土器に近い。

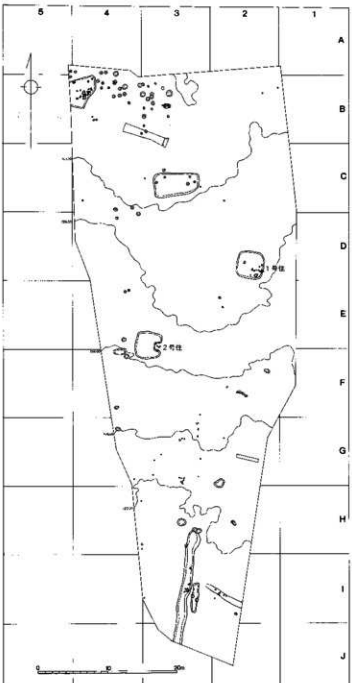
469～510は底部、517～519は台付深鉢底部である。511は中期後半の器台、512は後期前半の注口土器の注口部分、513はミニチュア土器と思われる。514～516は口縁部の突起である。

以上のなかで最も出土量が多い中期終末土器については次章でもとりあげる。

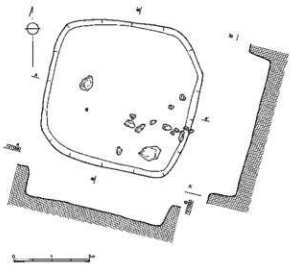
C区出土縄文時代石器（第46図～第50図、第５表、第６表）

C区から出土した石器は総数55点で、その内訳は石鏃２点、石匙３点、スクレーパー２点、磨製石斧２点、打製石斧10点、横刃形石器３点、磨石15点、凹石７点、ピエス・エスキーユ１点、小剥離のある剥片１点、石核１点、剥片７点、棒状礫１点である。

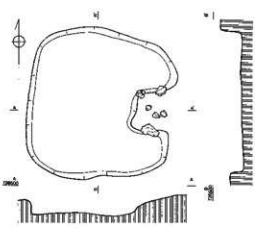
１・２は無茎凹基の石鏃である。ともに完形で黒曜石製である。３・５・６は石匙で、３は完形の斜型であり、５はつまみ部と体部が欠損しているが、おそらく３と同様に斜型であろう。６は完形の横型である。石材は３がホルンフェルス、５・６がチャートである。４は刃部端の破片であり、スクレーパーとしているが、石匙の可能性もある。石材は頁岩である。９は黒曜石製のスクレーパーで、刃部を作り出すための剥離と一部を除きほとんどが自然面であり、原石をそのまま利用している。７・８は定角式の小型磨製石斧である。どちらも刃部から基部にかけて欠損している。10は側縁部に小剥離のある剥片である。11は上下２辺に階段状の剥離痕と、それ以外に対辺に向かってのびる剥離痕があるので、ピエス・エスキーユであろう。背面は階段状剥離痕以外は自然面であり、石材は黒曜石である。12は黒曜石原石の周りを打ち欠いているので石核とした。13～19は剥片である。石材は13・17が安山岩、14～16が黒曜石、18・19がホルンフェルスであり、18と19は接合する。20～29は打製石斧である。22以外は刃部に向かって幅広になったり、側縁部が屈折する撥型であり、20・29以外は刃部あるいは基部が欠損している。30～32は横刃形石器である。30は表裏面ともに磨り痕が確認でき、表面左側（裏面右側）の抉り部および上部は研磨して成形している。石材は30が粘板岩、31が硬質頁岩、32がホルンフェルスである。33～47は磨石である。磨面の数で分類すると、磨面が１面のもの１点（41）、表裏の２面に磨面をもつもの９点（33～36・38・40・43～45）、磨面が３面のもの１点（39）、磨面が４面のもの３点（37・42・46）、不明のもの１点（47）となる。40は両側面に敲打痕がある。石材は43・45が片麻岩で、それ以外は安山岩であるが、安山岩のなかでも38・39・42・47は輝石安山岩である。48～54は凹石である。ここでは磨面があっても凹みをもつものを凹石とした。48は断面形態が三角で、各面に凹み２つと磨面があり、他に磨面が１面ある。49は表面に凹みが２つ、裏面に磨面がある。50は表裏面２つずつ凹みがある。51は表面に凹みが３つ、側面に磨面２つ、裏面に磨面１つある。52・53は表裏面に１つずつ凹みがある。54は約半分欠損しているので全体の数はわからないが、表裏面に２つずつ凹みが残っている。石材は全て輝石安山岩である。55は棒状の礫であり、特に使用痕等は確認できない。磨石と凹石と合わせた総数22点を、磨面・凹部・敲打痕の３つの使用痕の組み合わせで分類すると、磨面のみ14点(63.6%)、凹部のみ４点（18.2%）、磨面＋凹部３点（13.6%）、磨面＋敲打痕１点（4.6%）である。本遺跡の磨石類の特徴は、単独の使用痕をもつものが圧倒的に多く、複数の使用痕をもつものは少ない。特に敲打痕をもつものは１点しかない。



第15図　C区西全体図



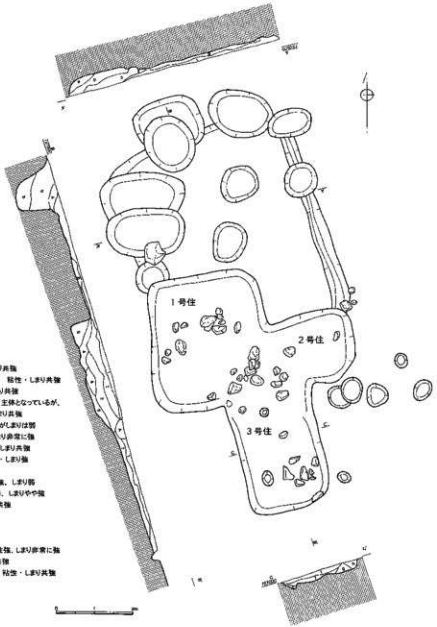
第16図　C区西１号住居



第17図　C区西２号住居

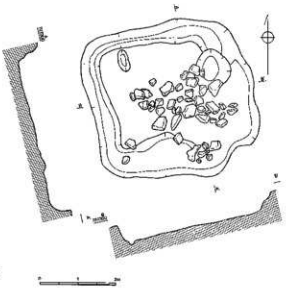
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
F
G
溝
1号住
2号住
3号住
4号住
5号住
6号住
7号住
8号住
9号住
10号住
高研堀
0
10
20m

第18図　C区東全体図

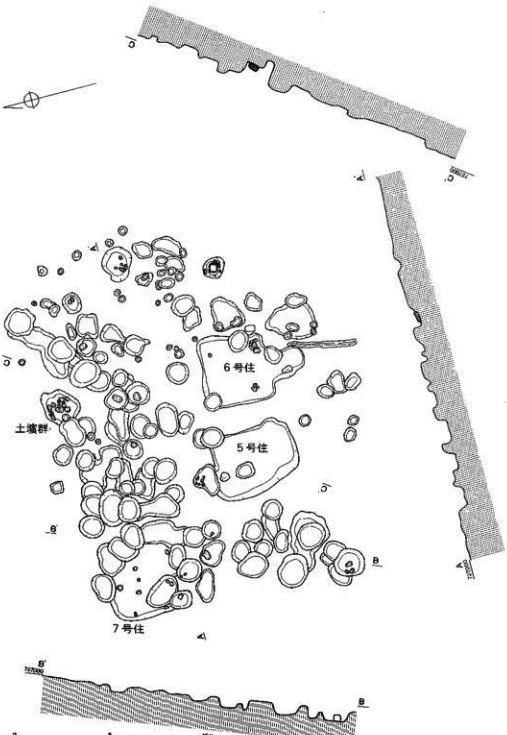


1. 黒褐色土層　ロームブロックを少量含む　粘性・しまり共強
2. 茶褐色土層　ロームブロック及びローム粒子を多く含む　粘性・しまり共強
3. 黒褐色土層　ローム粒子をやや多く含む　粘性・しまり共強
4. 明黒色土層　ロームブロック及びローム粒子を多く含み、主体となっているが、黒色土粒子も混入している。粘性・しまり共強
5. 灰黄褐色土層　地山ロームの再堆積土層　粘性はあるがしまりは弱
6. 黒褐色土層　ローム粒子は極めて少ない。粘性・しまり非常に強
7. 褐色土層　地山ローム粒子を多量に含む。粘性・しまり共強
8. 黒褐色土層　ローム粒子を多量に含む。粘性やや弱・しまり強
A 黒褐色土層　黒色系のとた壁、砂質土を主体とする
a 黒 色 土 層　褐色スコリアを極めて少量含む。粘性強、しまり弱
b 黒褐色土層　小礫・ローム粒子を少量含む。粘性弱、しまりやや強
b' 褐褐色土層　ローム粒をやや多く含む。粘性、しまり共強
c 黒褐色土層　ロームブロックを少量含む。
d 褐褐色土層　ローム粒子・ブロックをやや多く含む。
e 暗褐色土層　ローム粒子・ブロックを多く含む。
f 黒褐色土層　壁の覆土、ローム粒子を少量混入、粘性強、しまり非常に強
g 褐褐色土層　ロームブロックを多く含む。粘性・しまり共強
h 暗褐色土層　ロームブロックとローム粒子を少量含む。粘性・しまり共強

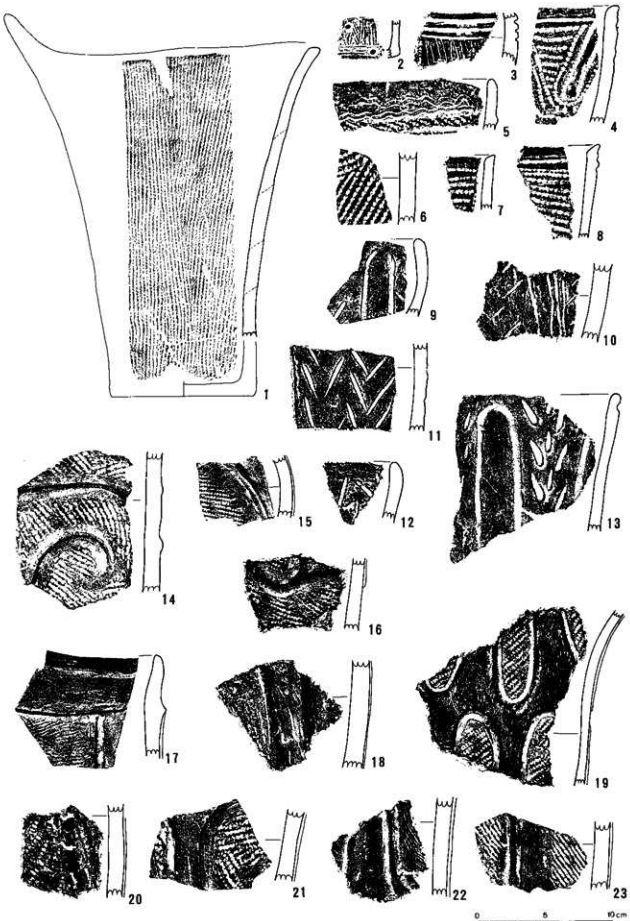
第19図　C区東１号住居、２号住居、３号住居



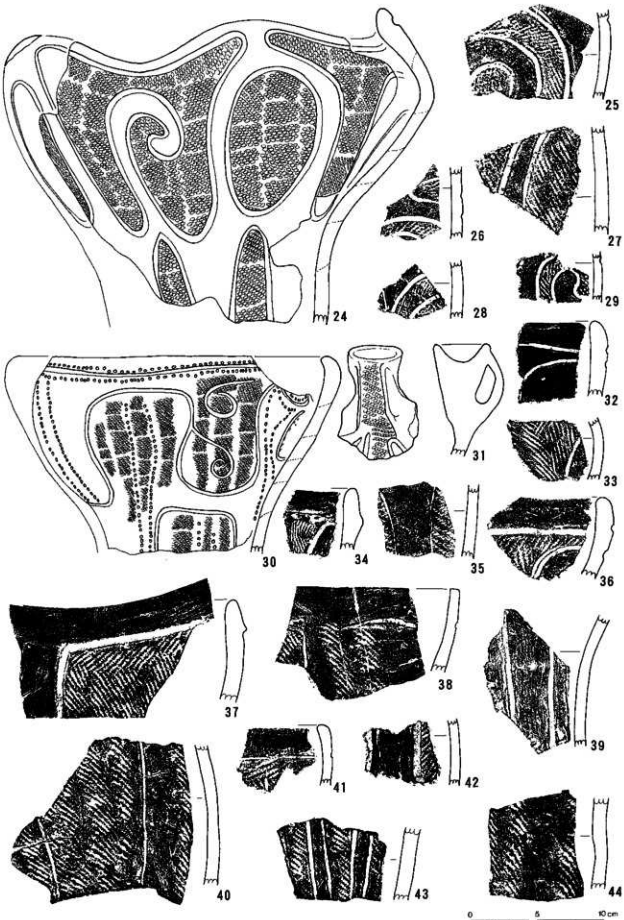
第20図　C区東４号住居



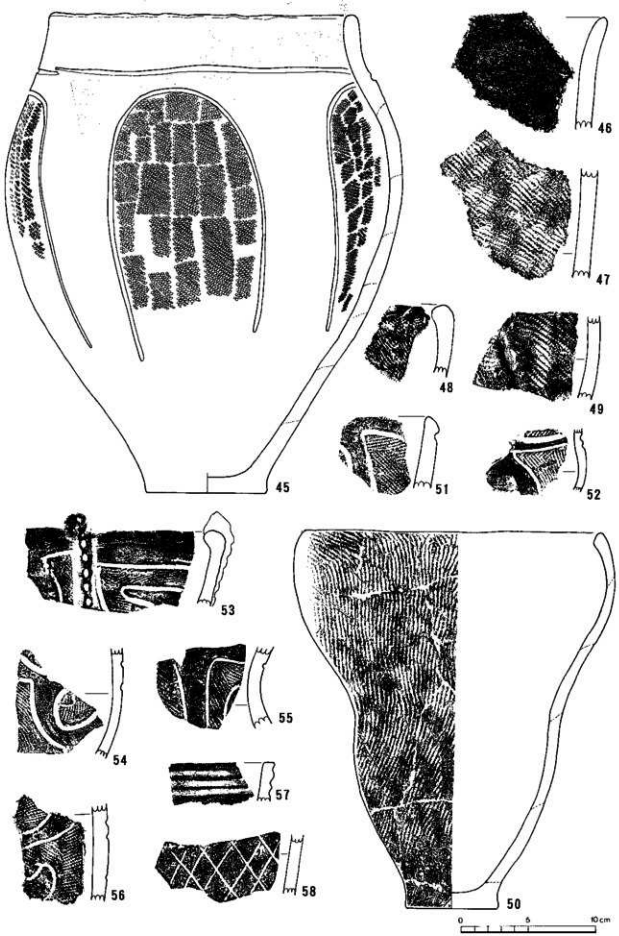
第21図　C区東5号住居、6号住居、7号住居　土壙群



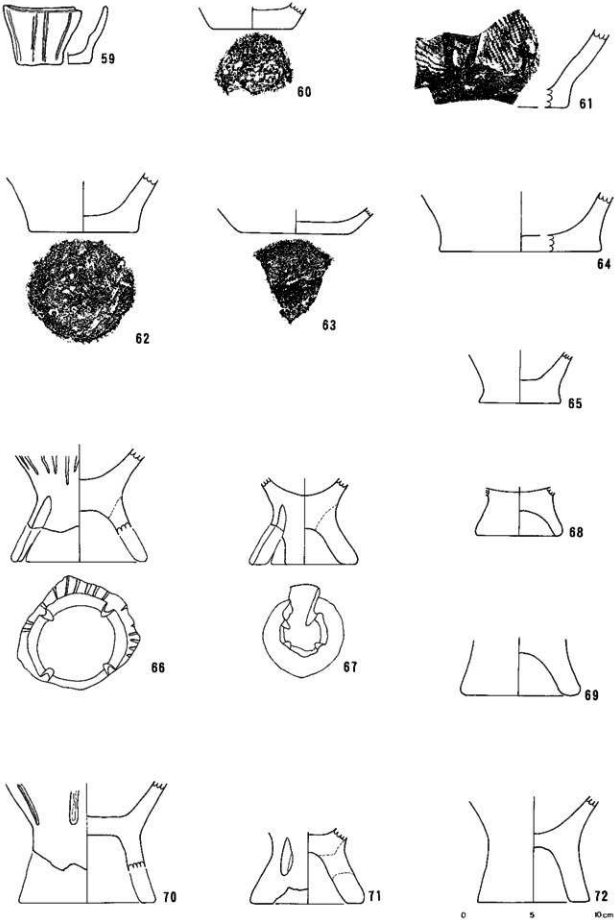
第22図　C区東土壙内出土土器１



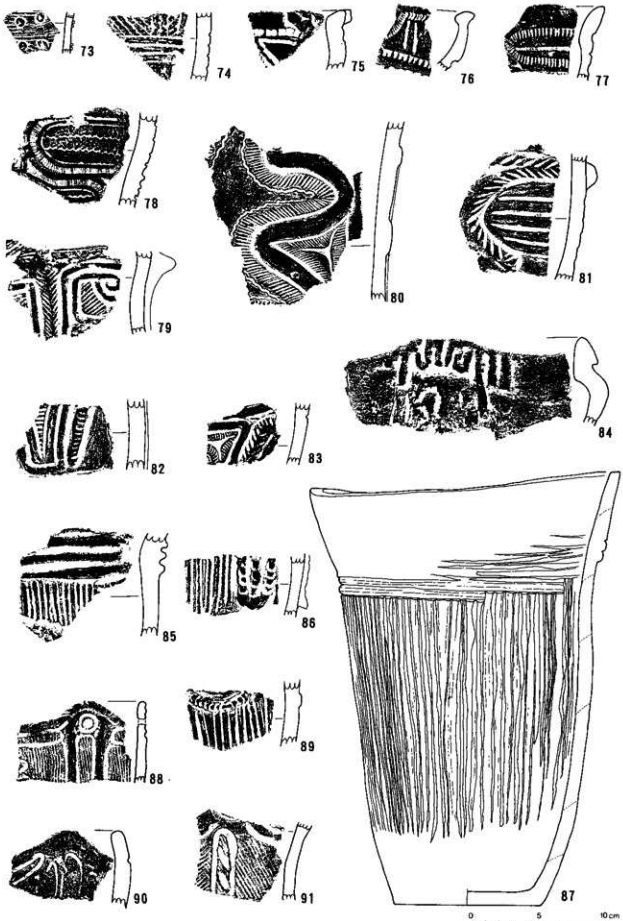
第23図　C区東土壙内出土土器２



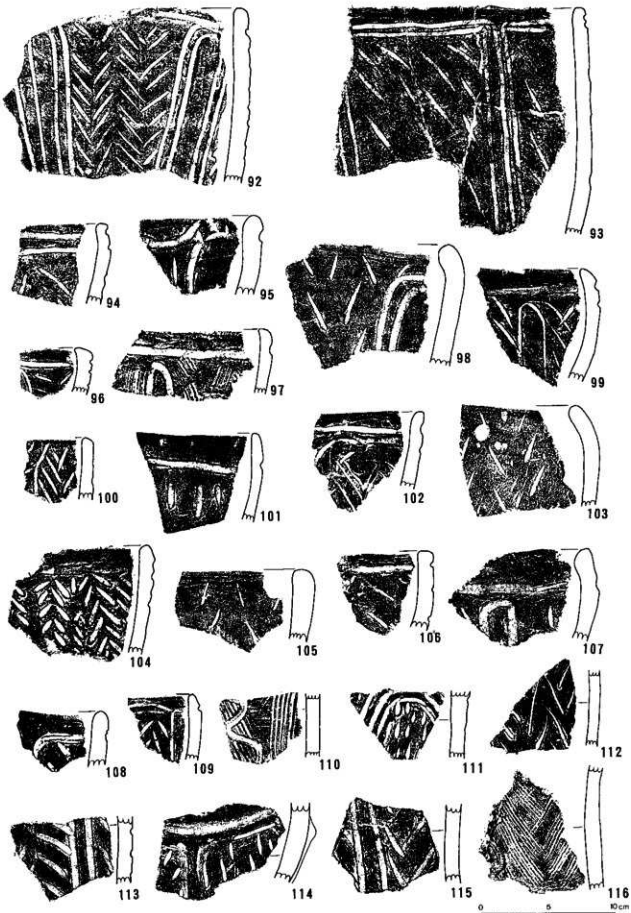
第24図　C区東土壙内出土土器３



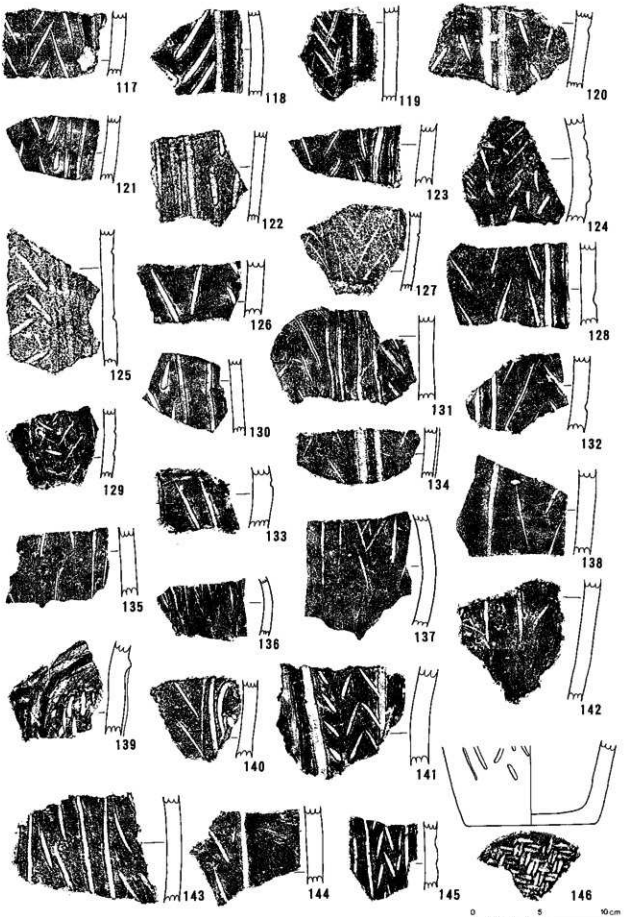
第25図　C区東土壙内出土土器４



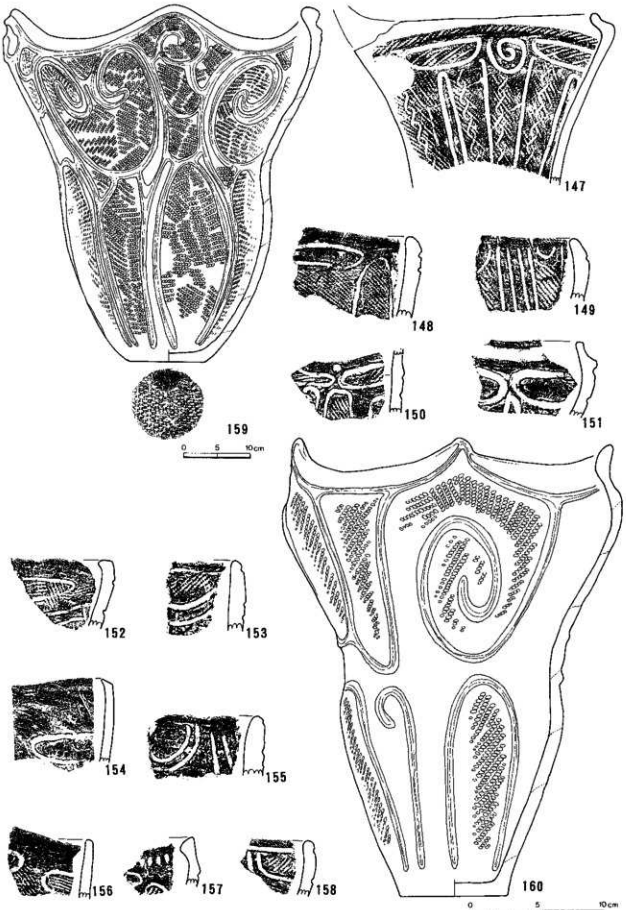
第26図　C区東出土土器1



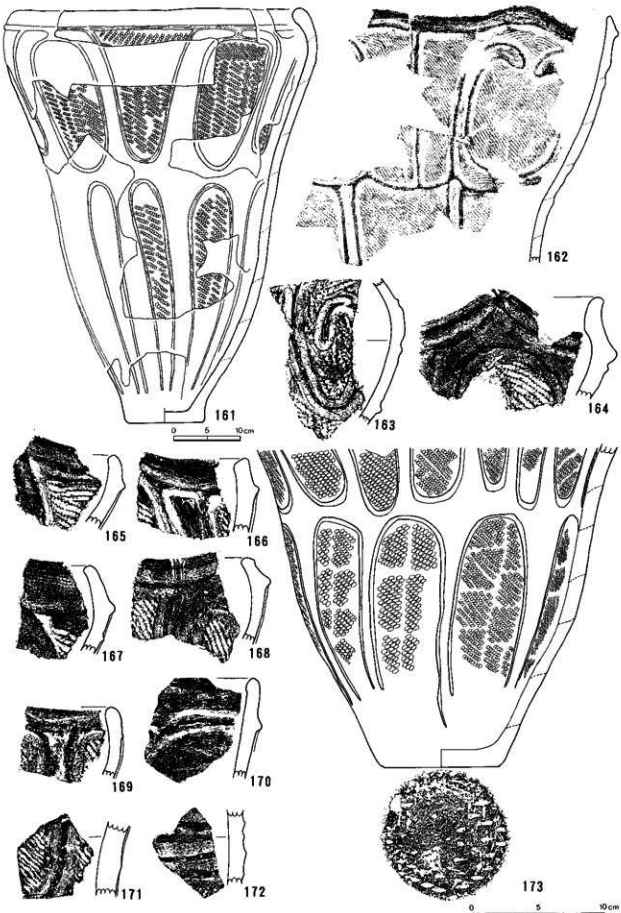
第27図　C区東出土土器２



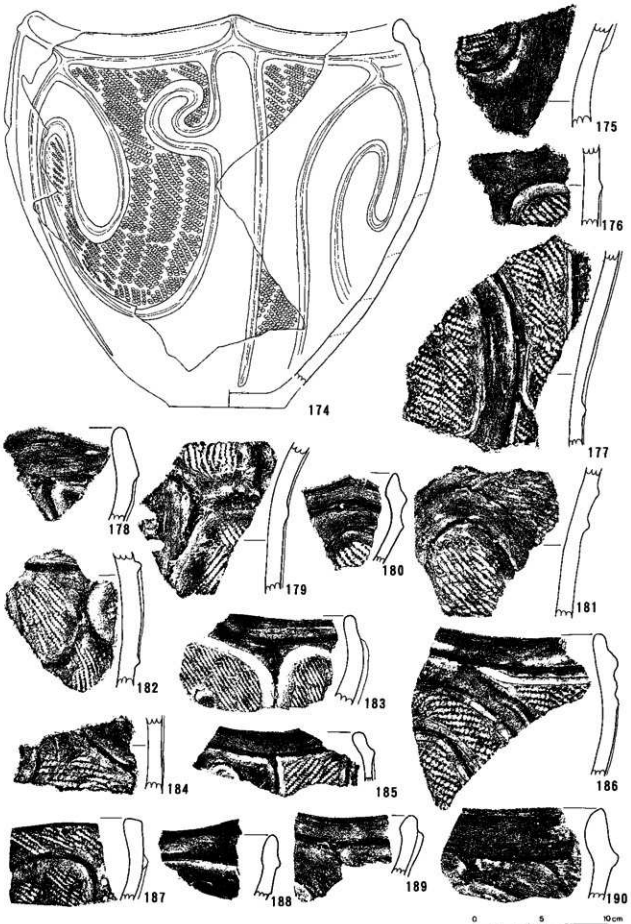
第28図　C区東出土土器３



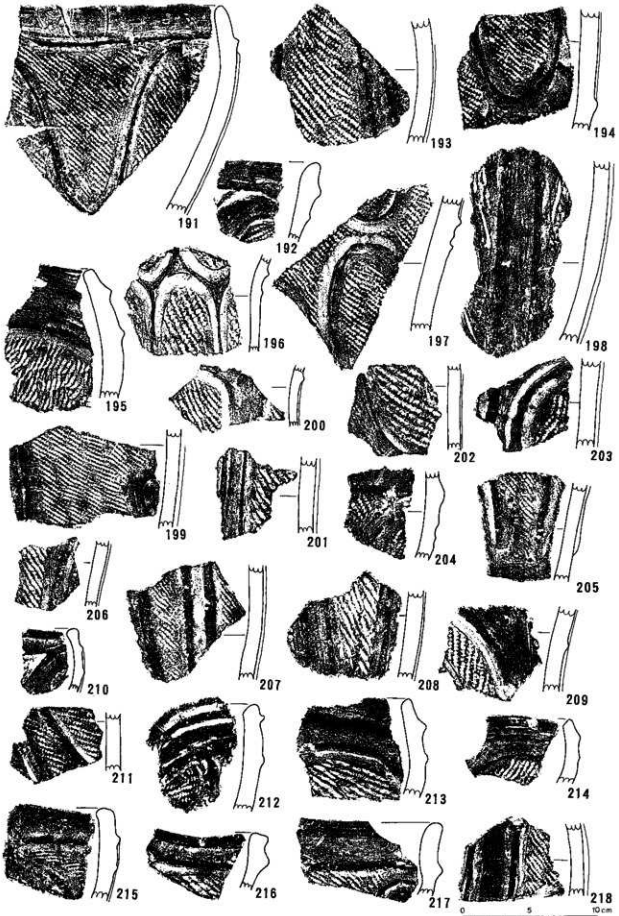
第29図　C区東出土土器４



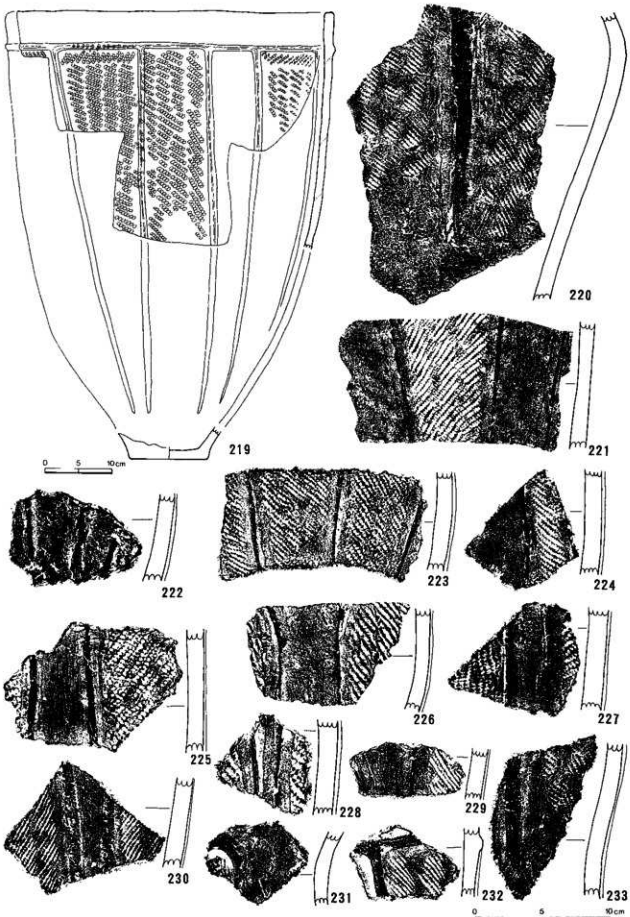
第30図　C区東出土土器５



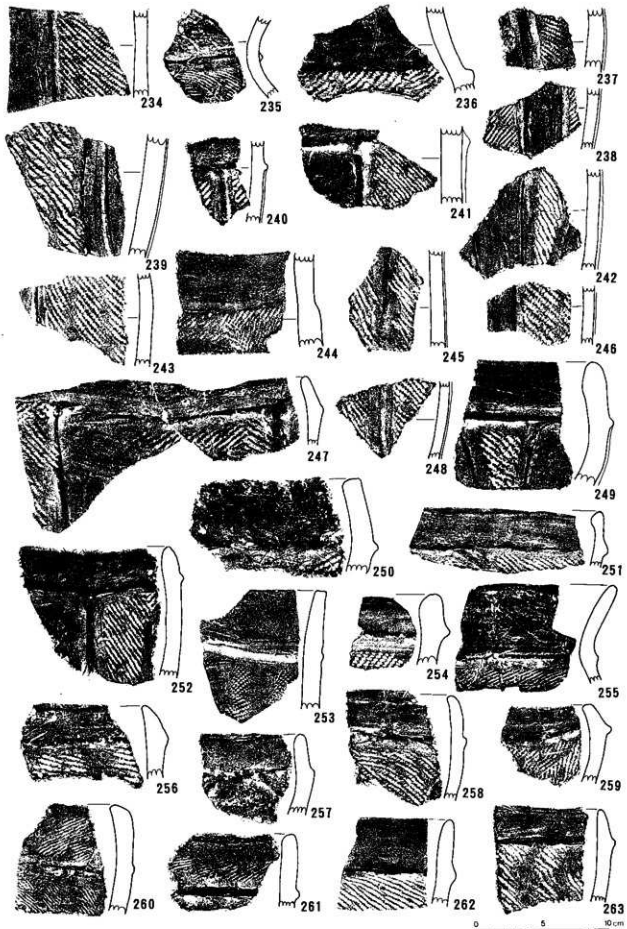
第31図　C区東出土土器6



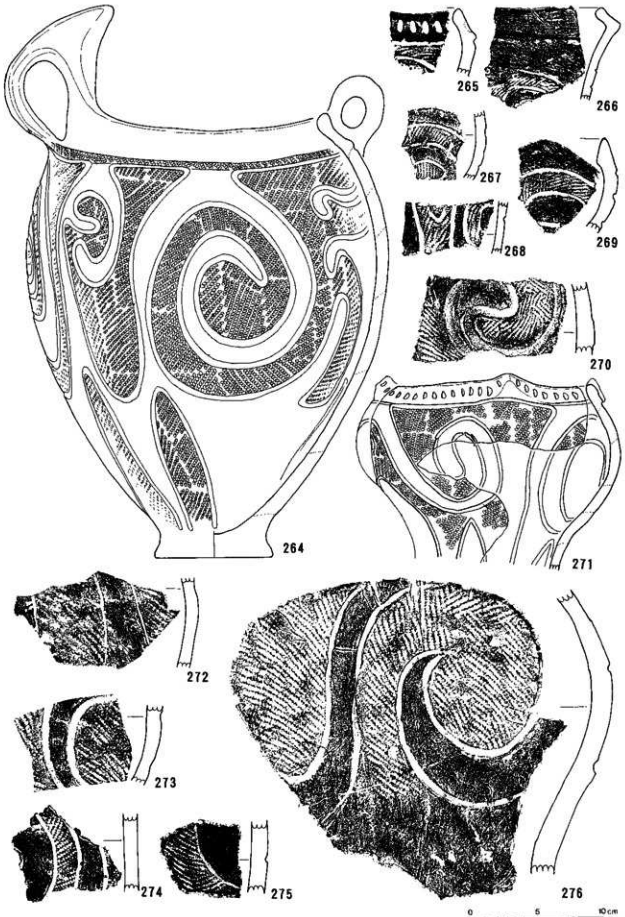
第32図　C区東出土土器７



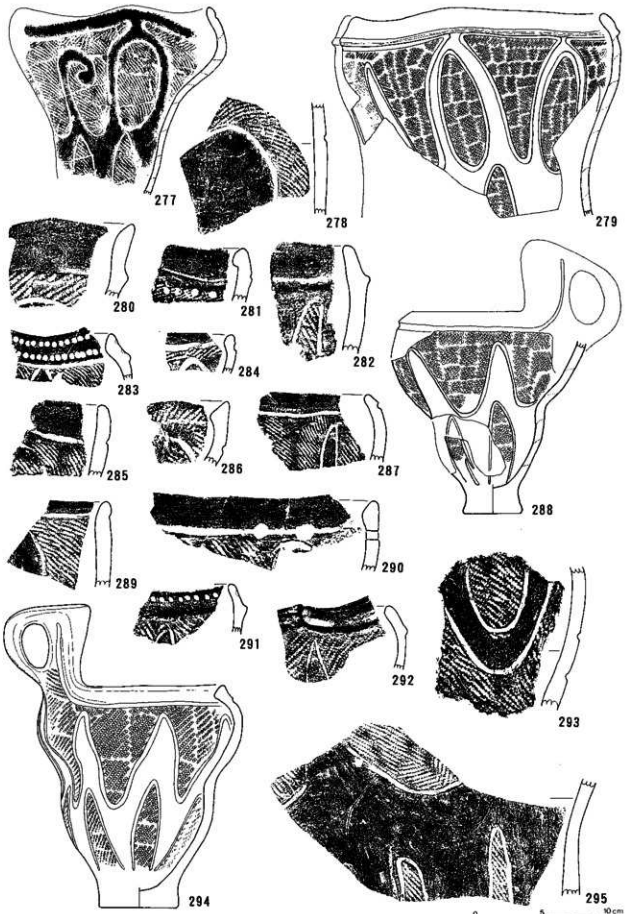
第33図　C区東出土土器8



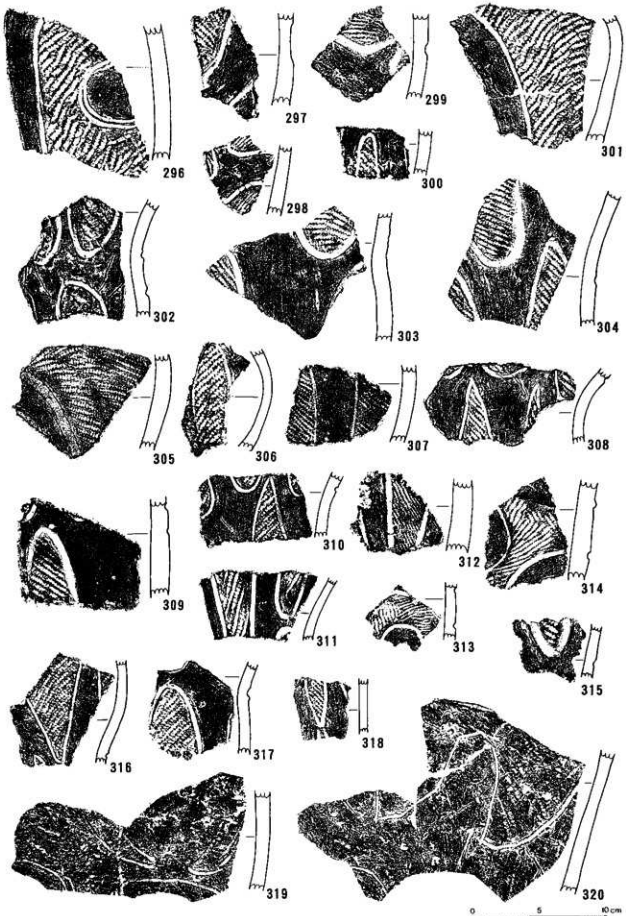
第34図　C区東出土土器９



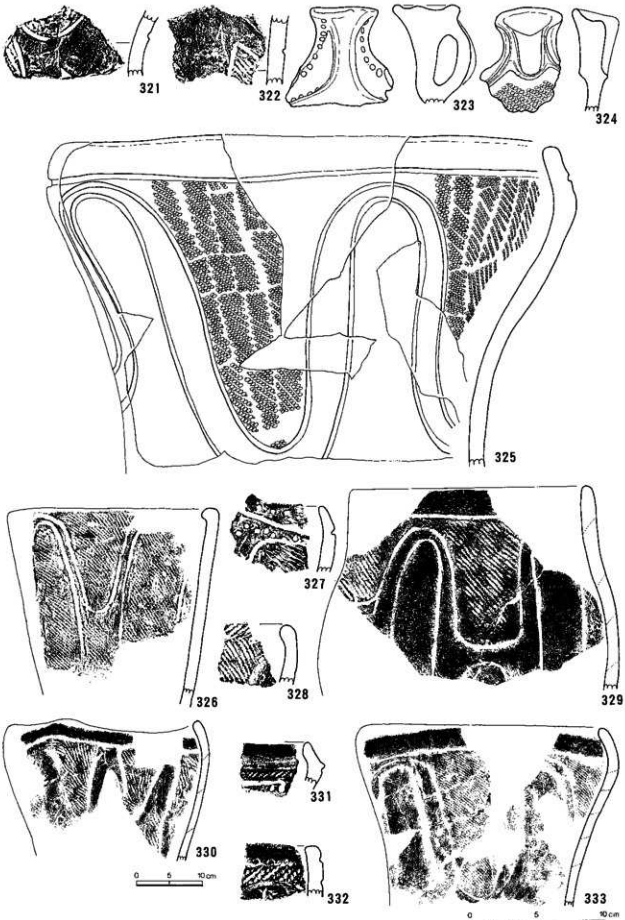
第35図　C区東出土土器10



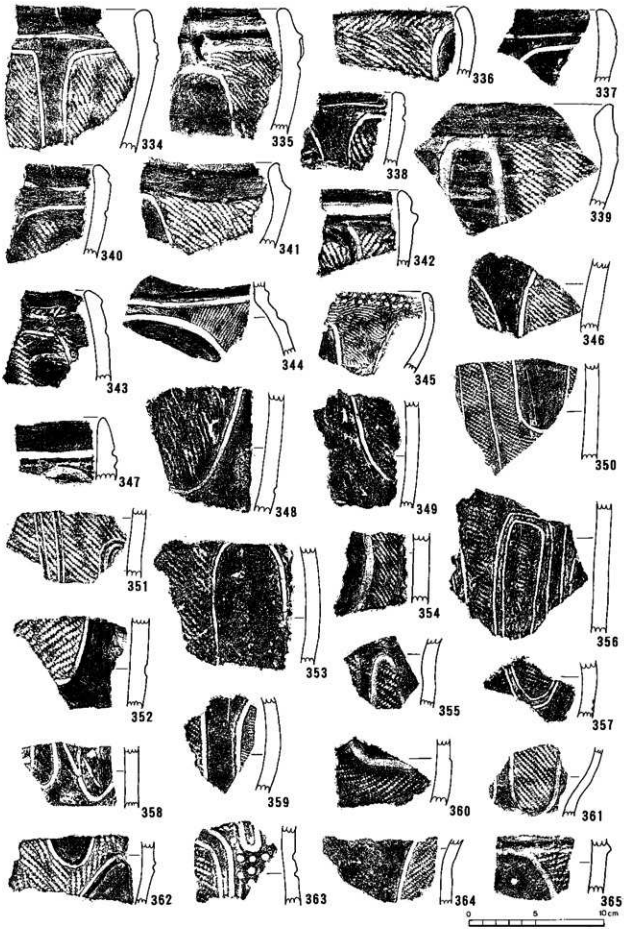
第36図　C区東出土土器11



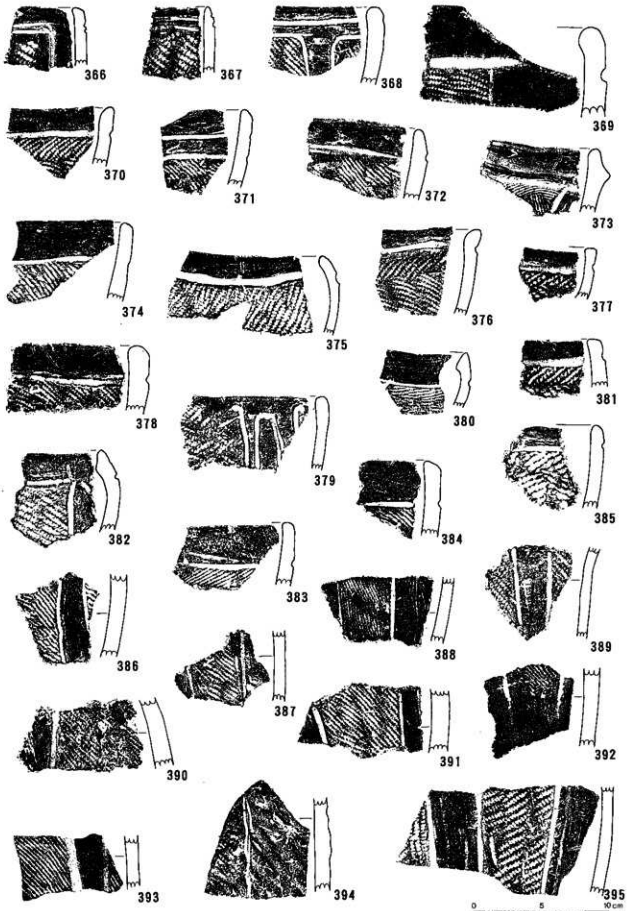
第37図　C区東出土土器12



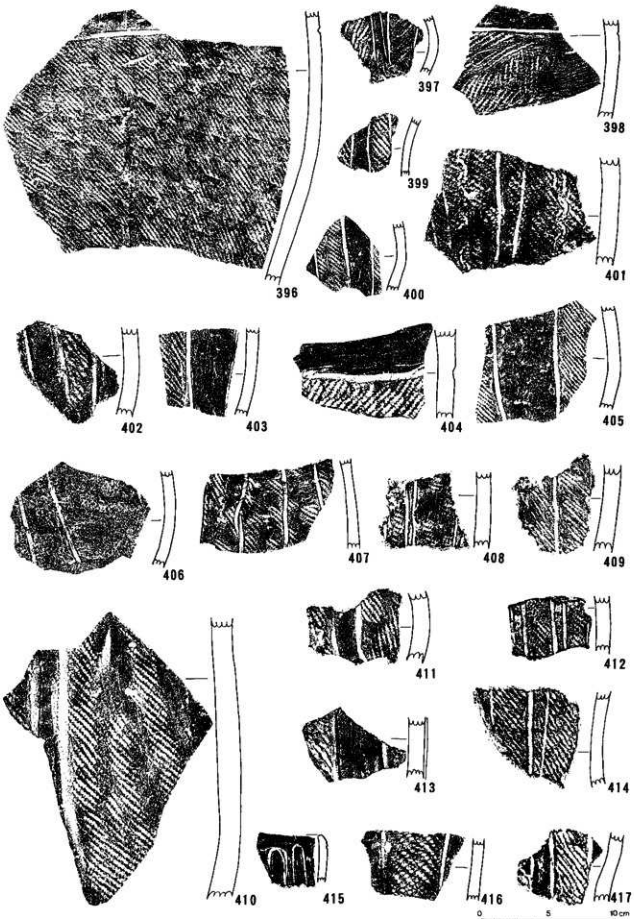
第38図　C区東出土土器13



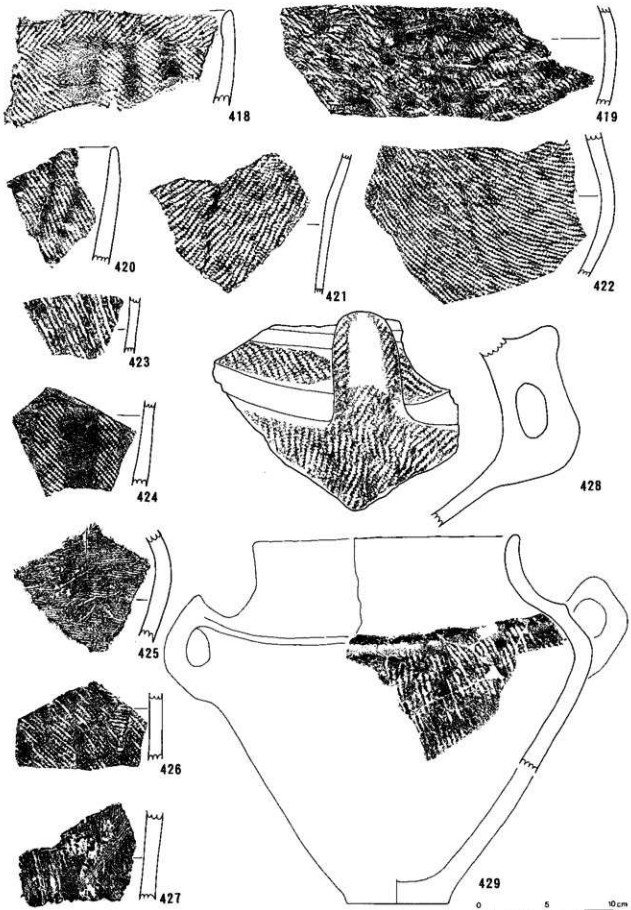
第39図　C区東出土土器14



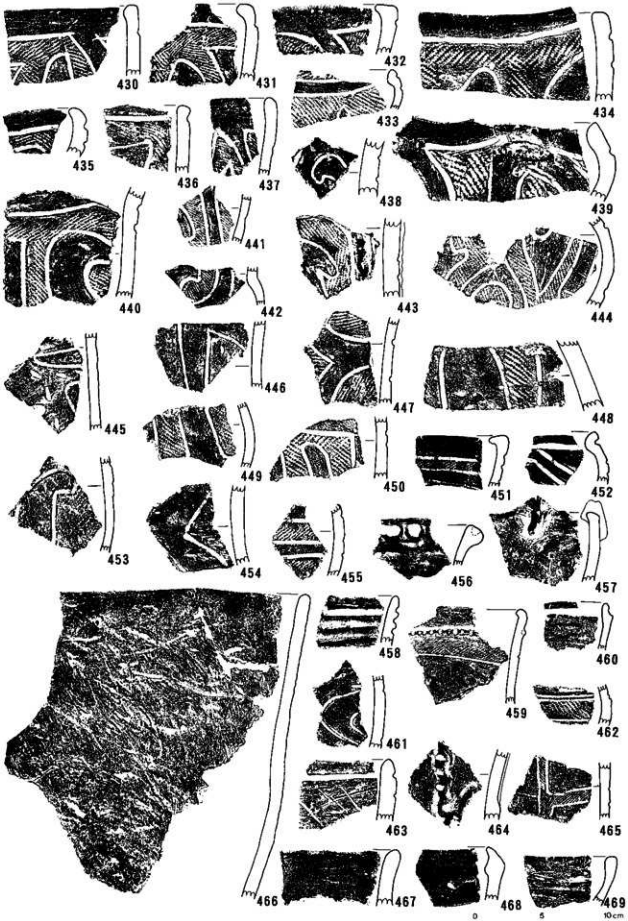
第40図　C区東出土土器15



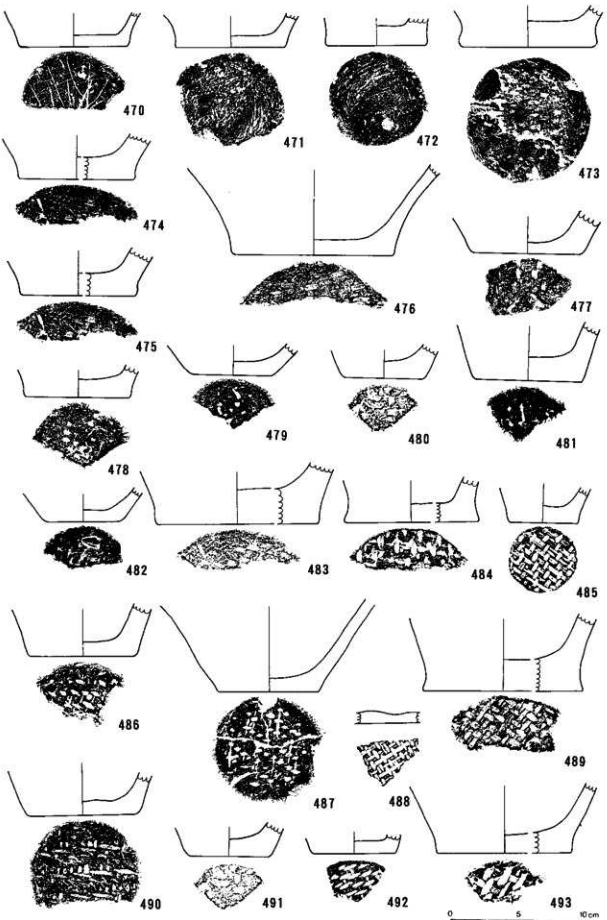
第41図　C区東出土土器16



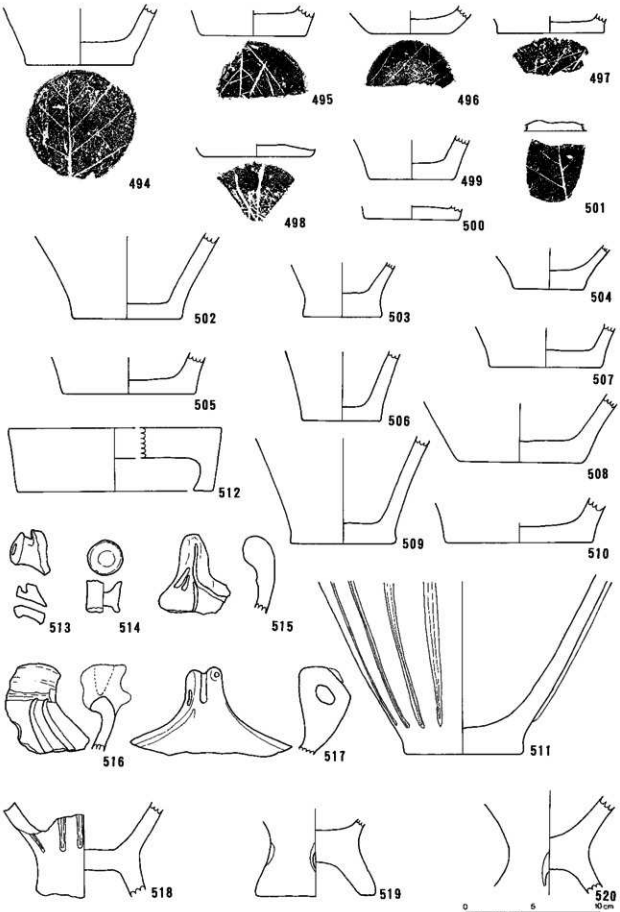
第42図　C区東出土土器17



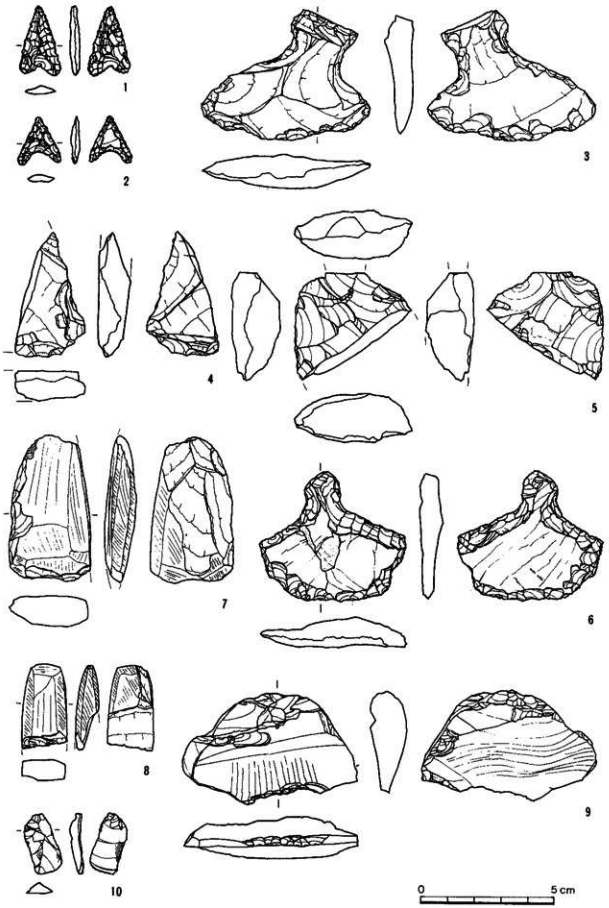
第43図　C区東出土土器18



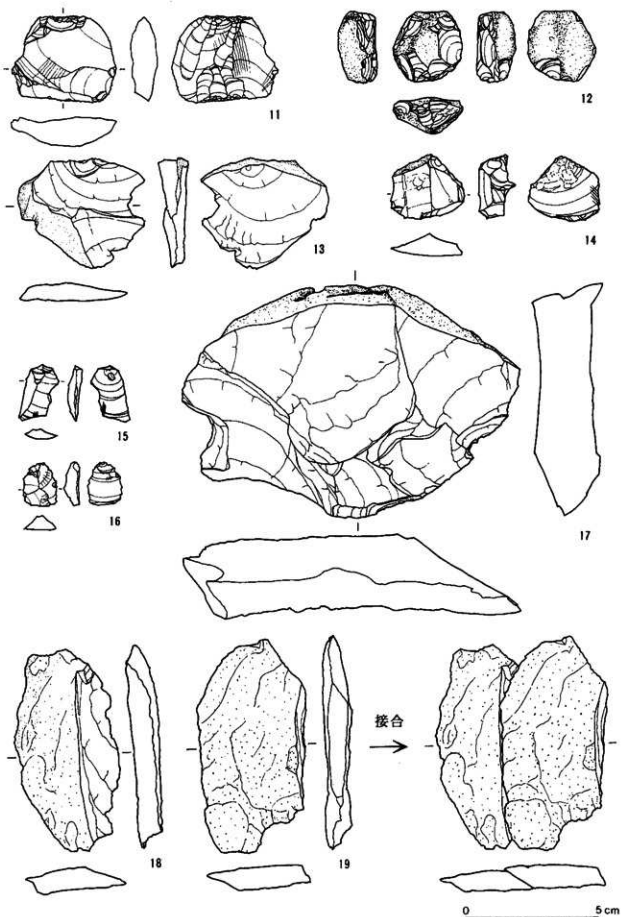
第44図　C区東出土土器19



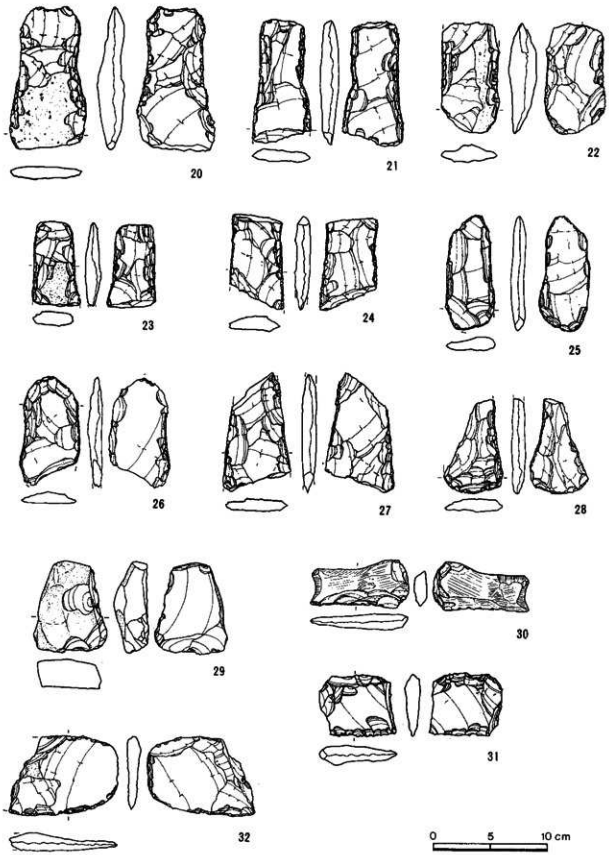
第45図　C区東出土土器20



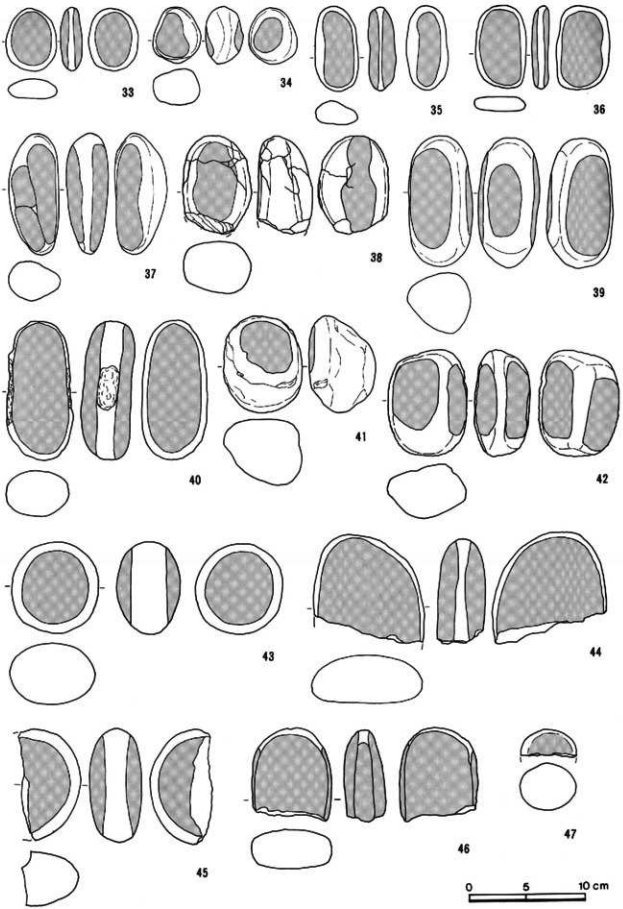
第46図　C区東出土石器１



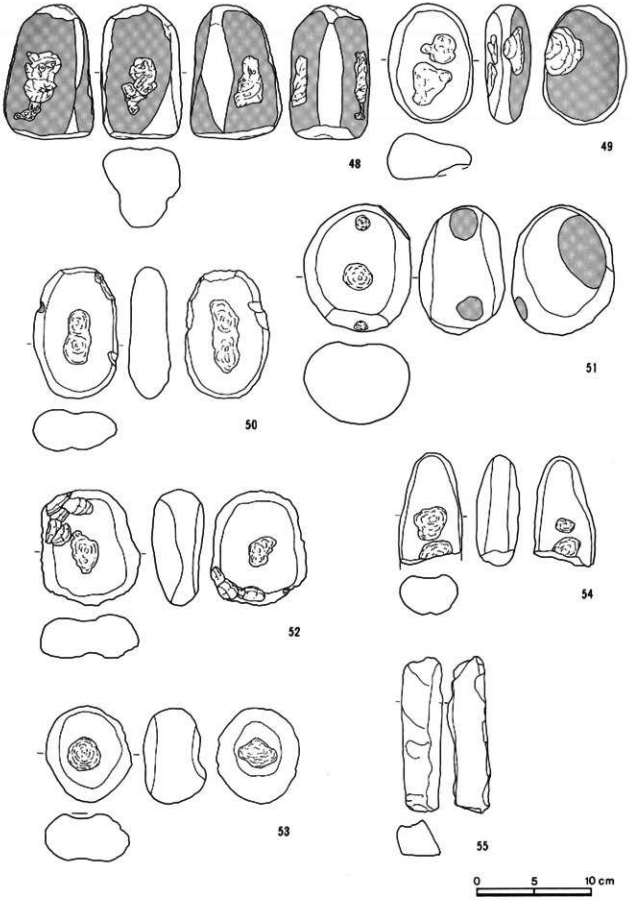
第47図　C区東出土石器２



第48図　C区東出土石器３



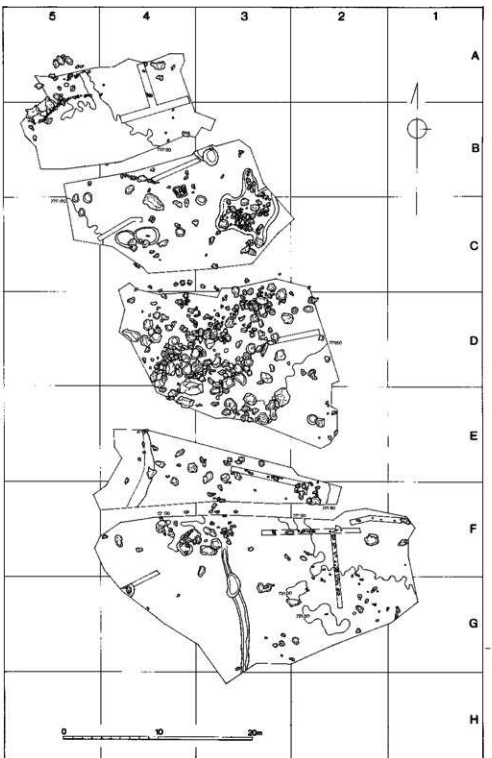
第49図　C区東出土石器４



第50図　C区東出土石器５

4　D区の調査（第51図）

D区はB区とC区の中間に位置し、調査面積は1,180㎡である。ほぼ北から南に傾斜する緩斜面上にある。調査区中央に径１～２ｍほどの礫が集中している。いくつかの竪穴状の落ち込みがあるようだが、詳細はわからない。



第51図　D区全体図

第４章　調査のまとめ

１　Ｃ区東地区出土の縄文時代中期終末土器について

1996年度の整理作業をすすめるなかで、比較的新しい段階の加曽利Ｅ式に近似した土器群が、山梨県地域のなかでも目立って多く出土していることがわかった。単純に土器片量で比較するならば、これらの土器群は曽利式土器の５倍以上の出土量である。曽利式も含め中期終末の土器群を簡単にまとめておきたい。

●曽利式新段階

基本的に条線を地紋とした曽利式土器は出土量が比較的少ないが、終末段階の胴部に連続への字紋が施された土器が圧倒的に多い。第26図88、第27図110などは胴部に蛇行懸垂紋をもつ土器で、曽利Ⅳ式に含まれる可能性がある。他は口縁部紋様が沈線による弧線紋、あるいは横位に一条の沈線を巡らすもので多くが曽利Ｖ式に位置づけられる（第27図）。同図92のように胴部の連続への字紋が比較的密にしっかり施紋されるものと、93のように疎らなものが混在し、若干の時間差があるものと思われる。

●加曽利Ｅ式系(1)：口縁部紋様帯を有する土器群

縄紋地紋の土器群のなかでは、口縁部に渦巻紋と楕円紋がある第29図147がより古い段階（曽利Ⅳ式併行）のものと思われる。胴部に結節縄紋が施され、曽利式後半のなかでも比較的古段階に多いとされる胴部蛇行懸垂紋との紋様的な共通性を指摘できよう。この結節縄紋について近隣に類例を求めると、甲府盆地北西の敷島町金の尾遺跡23号住居出土土器（第52図１）[11]がある。縄紋地紋の土器としては大泉村姥神遺跡12号住居出土土器（第52図２）[12]などが併行すると考えられる。

さらに、第29図148～158のように楕円紋や弧線紋が認められるものがある。曽利式においては、渦巻紋と楕円紋それに弧線紋の組み合わせから、前二者が時間的変化とともに欠落していく傾向が認められ[13]、これらの土器についても同様の時間差が想定できるかもしれない。北巨摩地域では柳坪遺跡４区縺層出土土器、高根町次郎構遺跡ＳＫ22出土土器（第52図３）[14]、高根町川又坂上遺跡第２地区１号住居出土土器（第52図４）[15]、韮崎市新田遺跡Ｃ－６Ｇ出土土器（第52図５）[16]など、北巨摩では比較的類例が多い。これらは曽利Ｖ式のなかでも古い段階に併行するのではなかろうか。

●加曽利Ｅ式系(2)：口縁部紋様帯をもたない土器群

器形は胴部中央が括れ、下半にやや膨らみをもつものが多いようであるが、第24図45、第35図264などは胴部中央やや上部に最大径をもつ特徴的な器形で、やや安定感に欠ける形状である。また第23図30は基本的には加曽利ＥⅢ式後半から同Ⅳ式にみられる対向U字紋をモチーフにしながらも、各紋様構成には混乱した様相さえ感じられる。第23図43のように胴部に垂下する平行沈線間の幅が比較的狭いものは

より古い段階が予想される。

稲村晃嗣氏は加曽利Ｅ式新段階の紋様構成について、対向Ｕ字交錯文類型・渦文逆Ｕ字交錯文類型・併行垂下文類型の３タイプの存在を指摘しているが[17]、小屋敷遺跡の資料も概ねこれらの類型に対応させることが可能であろう。

対向Ｕ字交錯文類型に相当するのは、第23図24・30、第30図161・173、第36図277・279・288・294、第38図325・326・329・330・333などで、北巨摩地域では韮崎市宮ノ前遺跡１号単独埋甕（第52図６）に近例があるが、須玉町郷蔵地遺跡１号住居出土土器（第52図７・８）のようなタイプの土器は明確なものが認められない。

渦文逆Ｕ字交錯文類型に相当するのは、第29図160、第35図264・271・276があり、第31図174の鉢も器形上の制約で下半の逆Ｕ字紋が省略されたものであろう。北巨摩地域では宮ノ前遺跡３号単独埋甕（第52図９）がある。第29図159の胴部全面に隆帯紋が施された土器は藤巻幸男氏らの編年[18]に従えば胴部隆帯紋土器Ⅵ期に位置づけられる。北巨摩地域では須玉町川又南遺跡14号埋甕(第52図10)[19]に類例がある。

併行垂下文類型に相当するのは、明らかなものは第33図219のみだが、破片資料は比較的多い。また第24図45は「併行垂下」とまではいえないがこれらのバリエーションだろうか。北巨摩地域では宮ノ前遺跡２号単独埋甕（第52図11）がある。これらの他に第24図50のように縄紋地紋のみのものはやはり宮ノ前遺跡２号単独埋甕（第52図12）に類例がある。

小屋敷遺跡の加曽利Ｅ式系土器群は、概ね口縁部紋様帯を喪失した段階の資料としてとくに量的に纏まることが特徴である。これらは鈴木保彦氏の編年[20]に従えば、第４様式ａ段階から、より古い部分のｂ段階に、また西関東を中心とした黒尾和久氏らの編年[21]では12ｃ段階から13段階にそれぞれ併行する。

小屋敷遺跡Ｃ区とは泉川を挟んで対岸に位置する柳坪遺跡では、４区縄層から小屋敷遺跡と同様の縄紋地紋の中期終末土器群が曽利式土器群に伴い比較的多数出土し、米田明訓氏はこれらの土器を「関東の加曽利Ｅ式土器あるいはそれに酷似したもの」[22]とした。これと小屋敷遺跡の加曽利Ｅ式系土器を比較した場合、柳坪遺跡では渦巻紋や楕円紋、弧線紋による口縁部紋様帯を有し、かつ胴部平行垂下紋の間隔も狭い土器が量的に目立つことから、小屋敷遺跡加曽利Ｅ式系資料より古いことが予想される。一方、須玉町郷蔵地遺跡１号住居出土土器（第52図７・８）に近い紋様構成をとるものは、小屋敷遺跡加曽利Ｅ式系土器のなかでは明確なものが見当たらない。破片資料にどの程度含まれているのか、いま一つ判然としないが、存在したとしても量的には少ないのではないだろうか。このことが、当加曽利Ｅ式系土器群の時間的下限を左右するものなのかについては今後の課題である。

小屋敷遺跡では後期の称名寺式以降の土器群も出土しているが、これらは量的には極めてわずかで、遺構らしいものも確認できない。中期終末を頂点としてそれ以降の土地利用は低調になったと思われる。東隣の柳坪遺跡もこの傾向は同様で、後期以降の遺跡分布の中心は、同じ鳩川・泉川流域でもさらに１～２kmほど上流域の別当遺跡、金生遺跡、絶神遺跡などに移っていくようである。

2　おわりに

小屋敷遺跡の加曽利E式系土器群は、曽利式とは系譜を異にする中期終末土器群の変遷を八ヶ岳山麓・北巨摩地域で把握していく上で今後も問題になっていく資料である。中期終末に様式的に崩壊する曽利式にとってかわる土器様式の出現背景が当資料には多分に含まれているのではないだろうか。それだけに、各土器の出土状態がほとんど今日掴めない状態にあるのは残念である。せめておもだった土器の出土位置と、土壙間の切り合い関係だけでも検討できるならば、終末段階曽利式との供伴関係も含めて、加曽利E式系土器群についてもう少し詳細な変遷過程をここで予想できた可能性もある。

現場図面、写真などが見当たらないことについては、今日となっては憶測の域をでないが、必要な図面がそもそも無い（撮影・作図していない）場合と、図面等はあったがその後（他の文書産業作業にでも混じって？）紛失した場合の両要因が重なったのだろうか。いずれにしても当調査は、予算的にも時間的にもとくに厳しい条件の圃場整備事業に伴うものであったときき、本格的な埋蔵文化財行政がスタートしたばかりの当町教育委員会には、開発部局との調整も含めて遺跡の内容と調査面積がその調査能力をはるかに超えたものであった。

しかし、縄文時代中期終末そして中世という、当地域においてはとくに類例の少ない貴重な遺跡を記録保存した意味をここに充分報告できないことについては、埋蔵文化財行政を管轄する町教育委員会として重大な責任を負わざるを得ない。発掘調査から整理作業までの過程で、ご助言やご教示をいただいた関係各位に深くお詫び申し上げるとともに、「小屋敷遺跡」を遺してくれた八ヶ岳南麓の先人にも謝罪したいと思う。

[11] 山梨県教育委員会1987『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集　金の尾遺跡』

[12] 註6

[13] 佐野　隆氏（明野村教育委員会）の指摘による。

[14] 高根町教育委員会1996『次郎構遺跡』

[15] 山梨県教育委員会1993『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第75集　川又坂上遺跡』

[16] 韮崎市教育委員会1996『新田遺跡』

[17] 稲村晃嗣1990「加曽利E系列の土器群」『調査研究収録』7　横浜市埋蔵文化財センター

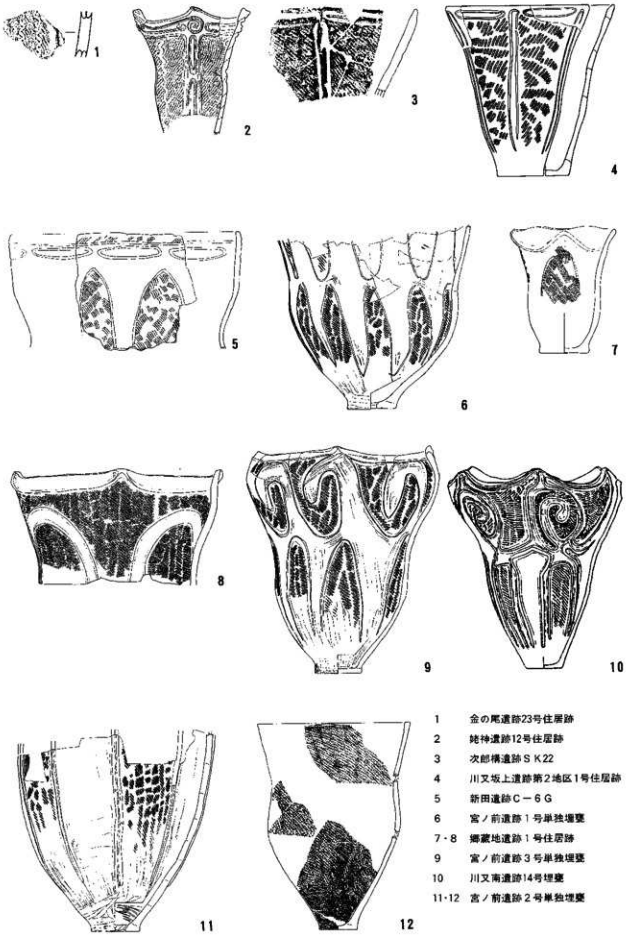
[18] 石坂　茂・藤巻幸男・桜岡正信1988「加曽利E式土器に関する一考察」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団

[19] 須玉町教育委員会1986『川又南遺跡』

[20] 鈴木保彦・山本暉久1988「加曽利E式土器様式」『縄文土器大観』2　小学館

[21] 黒尾和久・小林謙一・中山真治1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平（発表要旨・資料）』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会

[22] 米田明訓1986「中期後半土器の諸問題」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集　柳坪遺跡』



1　金の尾遺跡23号住居跡
2　姥神遺跡12号住居跡
3　次郎構遺跡ＳＫ22
4　川又坂上遺跡第２地区１号住居跡
5　新田遺跡Ｃ－６Ｇ
6　宮ノ前遺跡１号単独埋甕
7・8　郷蔵地遺跡１号住居跡
9　宮ノ前遺跡３号単独埋甕
10　川又南遺跡14号埋甕
11・12　宮ノ前遺跡２号単独埋甕

第52図　加曽利Ｅ式系周辺資料（縮尺不同）

表5　石器観察表

B区

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
1	石鏃	(2.63)	1.30	0.40	(1.2)	黒曜石	有茎凸基
2	打製石斧	12.0	4.6	1.6	125	シルト岩	撥形
3	〃	9.2	4.6	1.8	100	砂岩	〃
4	〃	7.0	4.7	1.4	55	ホルンフェルス	〃
5	〃	13.2	6.0	1.7	132	砂岩	〃
6	〃	(11.0)	5.0	1.6	(110)	ホルンフェルス	〃
7	〃	(9.8)	(4.9)	2.0	(105)	ホルンフェルス	〃
8	〃	(6.2)	5.5	0.9	(55)	砂岩	〃
9	〃	(9.2)	(5.4)	1.3	(90)	砂岩	短冊形
10	横刃形石器	(7.4)	(6.2)	1.8	(70)	ホルンフェルス	
11	〃	9.5	4.6	1.1	55	ホルンフェルス	
12	〃	9.1	4.1	1.2	68	頁岩	
13	〃	8.7	4.2	1.5	75	ホルンフェルス	
14	〃	10.8	4.0	0.9	65	ホルンフェルス	

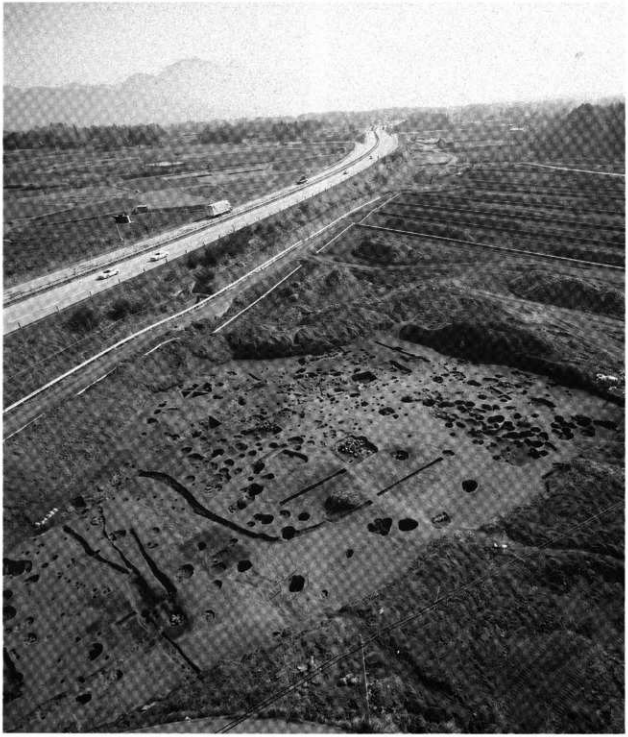
C区

1	石鏃	2.65	1.58	0.38	1.0	黒曜石	無茎凹基
2	〃	1.83	1.62	0.32	0.5	黒曜石	〃
3	石匙	4.96	6.31	1.25	30.8	ホルンフェルス	斜型
4	スクレイパー	(4.68)	(2.67)	(1.25)	(12.5)	頁岩	
5	石匙	(4.11)	(4.38)	(1.80)	(28.8)	チャート(白いスジが目立つ)	
6	〃	4.96	5.49	1.15	20	チャート	横型
7	扁平石斧	(5.52)	(3.09)	(1.15)	(30.2)	凝灰岩	定角式
8	〃　(小型)	(3.20)	(1.70)	(0.85)	(6.4)	頁岩	〃
9	スクレイパー	4.24	6.58	1.60	32	黒曜石	不定形
10	小剥離のある剥片	2.30	1.41	0.50	0.8	黒曜石	
11	ピエス・エスキーユ	3.26	3.90	1.32	14	黒曜石	
12	石核	2.66	2.57	1.45	10.1	黒曜石	
13	剥片	4.19	4.74	1.12	15.1	安山岩	
14	〃	2.45	2.73	1.35	5.5	黒曜石	
15	〃	2.10	1.48	0.53	0.8	黒曜石	
16	〃	1.61	1.27	0.60	0.8	黒曜石	
17	〃	8.75	12.52	3.15	321	安山岩	
18	〃	7.62	3.88	1.13	30	ホルンフェルス	19と接合
19	〃	7.98	4.07	1.19	37	ホルンフェルス	18と接合
20	打製石斧	12.6	6.5	2.3	235	砂岩	撥型
21	〃	10.9	5.1	1.4	120	ホルンフェルス	〃
22	〃	(9.8)	5.2	2.3	(140)	頁岩	短冊型
23	〃	(8.5)	4.2	1.3	(55)	頁岩	撥型
24	〃	(8.3)	4.9	1.2	(65)	砂岩	撥型
25	〃	(10.2)	4.4	1.2	(66)	ホルンフェルス	〃
26	〃	(9.6)	5.2	1.2	(55)	頁岩	〃
27	〃	(10.5)	6.0	1.1	(85)	ホルンフェルス	〃
28	〃	(8.3)	5.2	1.2	(50)	砂岩	〃
29	〃	8.11	6.35	3.08	160	安山岩	〃
30	横刃形石器	4.25	8.43	1.40	55	粘板岩	表裏に磨痕あり
31	〃	5.4	5.5	1.7	70	硬質頁岩	
32	〃	(9.4)	8.1	1.6	(99)	ホルンフェルス	
33	原石	5.5	4.4	1.7	70	安山岩	磨面2
34	〃	4.94	4.15	3.27	72	安山岩	磨面2
35	〃	7.5	3.6	2.2	70	安山岩	磨面2
36	〃	7.3	4.5	1.4	60	安山岩	磨面2
37	〃	10.6	4.53	3.6	212	安山岩	磨面4
38	〃	(8.72)	6.15	4.8	(240)	輝石安山岩	磨面2
39	〃	11.48	5.71	5.43	445	輝石安山岩	磨面3
40	〃	12.3	5.8	4.3	420	安山岩	磨面2　側面に敲打痕
41	〃	8.55	6.9	5.79	383	安山岩	磨面1
42	〃	9.5	7.0	4.8	360	輝石安山岩	磨面4
43	〃	8.0	7.6	5.6	455	片麻岩	磨面2
44	〃	(9.5)	10.0	4.4	(565)	安山岩	磨面2
45	〃	9.9	(5.0)	4.4	(310)	片麻岩	磨面2
46	〃	(8.3)	7.0	3.6	(295)	安山岩	磨面4
47	〃	(2.41)	(4.72)	(4.1)	(51)	輝石安山岩	磨面(1)
48	凹石	11.85	7.07	7.92	781	輝石安山岩	凹3面各2、磨面4
49	〃	10.56	7.35	4.02	385	輝石安山岩	凹表2
50	〃	11.7	7.4	3.6	360	輝石安山岩	凹表2、裏2
51	〃	11.3	9.3	7.5	740	輝石安山岩	凹表3、磨面3
52	〃	10.2	8.8	4.2	430	輝石安山岩	凹表1、裏1
53	〃	8.6	7.4	5.0	325	輝石安山岩	凹表1、裏1
54	〃	(9.8)	5.6	3.7	(240)	輝石安山岩	凹表(2)、裏(2)
55	棒状礫	13.7	3.6	3.4	250	粘板岩	

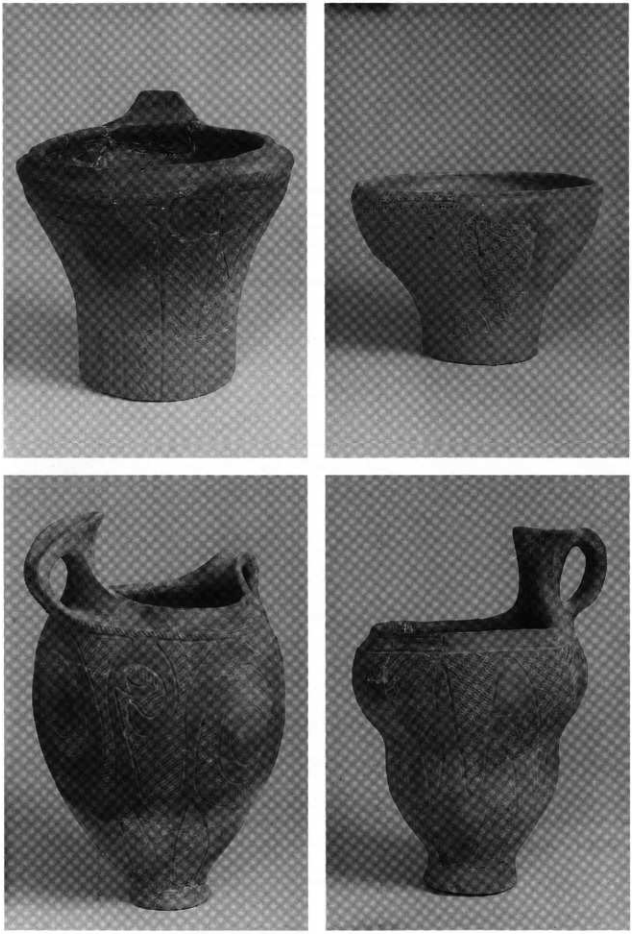
表6　小屋敷遺跡石器組成表

	石鏃	打斧	横刃	石匙	スク	磨斧	磨石	凹石	ピエス	小剥離	石核	剥片	棒	合計
B区	1	8	5											14
	7.2	57.1	35.7											100
C区	2	10	3	3	2	2	15	7	1	1	1	7	1	55
	3.6	18.2	5.5	5.5	3.6	3.6	27.3	12.8	1.8	1.8	1.8	12.7	1.8	100
合計	3	18	8	3	2	2	15	7	1	1	1	7	1	69
	4.3	26.1	11.6	4.3	2.9	2.9	21.7	10.1	1.5	1.5	1.5	10.1	1.5	100

上段：出土点数　下段：%数値

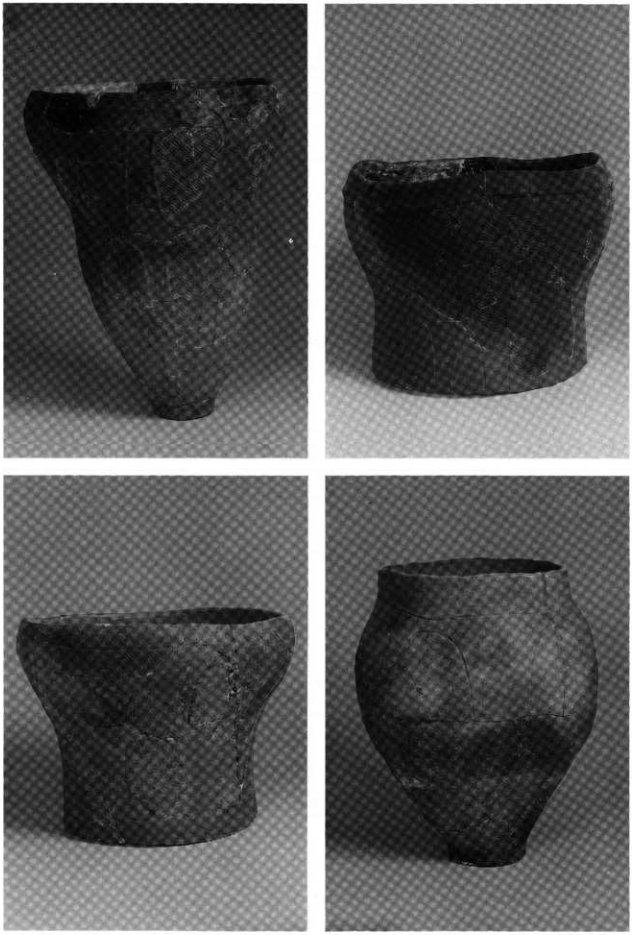


図版１　小屋敷遺跡Ｃ区東全景



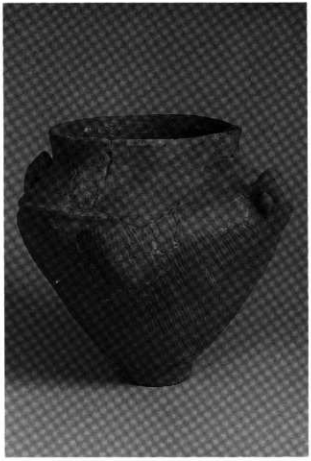
図版２　Ｃ区東出土土器

図版３　Ｃ区東出土土器



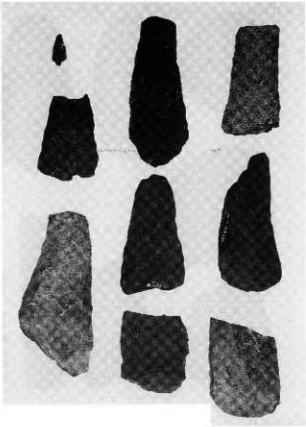
図版４　Ｃ区東出土土器

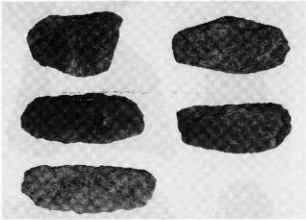
図版５　Ｃ区東出土土器



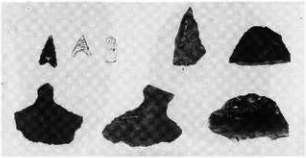
図版６　Ｃ区東出土土器

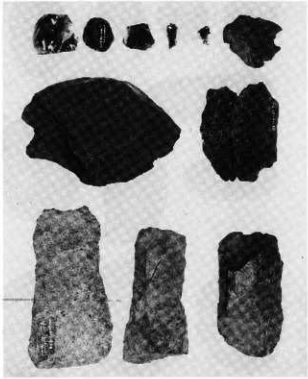
図版７　Ｂ区出土土器（上の１点）





図版８　Ｂ区出土石器





図版９　Ｃ区東出土石器

図版10　C区東出土石器

報告書概要

書名		小屋敷遺跡（おやしき）			
シリーズ		長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集			
著者名		小宮山　隆			
編集・発行者		長坂町教育委員会			
住所・電話		山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19　TEL 0551-32-2111			
印刷所		峡北印刷株式会社			
印刷日・発行日		1997年３月20日・1997年３月31日			
小屋敷遺跡		25000分の1地図名・位置・標高	谷戸	北緯　35°50′10″ 東経138°232′10″	720m
概要	主な時代	縄文時代中期後半・平安時代・中世			
	主な遺構	縄文時代中期初頭住居、同中期終末土壙群、平安～中世集落			
	調査期間	1991年６月～1991年10月			
	所在地	山梨県北巨摩郡長坂町大八田字小屋敷ほか			

長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書　第13集

小屋敷遺跡

1997年３月20日　印刷
1997年３月31日　発行

編集・発行　長坂町教育委員会
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2575-19
TEL 0551-32-2111

印　　刷　峡北印刷株式会社
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条2313
TEL 0551-32-3245